
テンプレ乙が往くッ！

刈意

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレ乙が往くッ！

【Nコード】

N7342J

【作者名】

刈意

【あらすじ】

テンプレ乙な展開の後、目を開けると、そこは……

チート乙な主人公が、特に期待も希望も無く、流されるままに生きていく物語です。

鉄板の始まり（前書き）

テンプレート乙で俺TUEEEEEが語る物語。

成分に中二病、俺TUEEEE、テンプレ乙、ご都合主義の成分が多く含まれています。

アレルギーの在る方は、服用を中止して、最寄の書店にお急ぎください。

尚、アレルギーの無い方でも、発作を起こす可能性が在りますので服用の際には強い意志を用意してください。

作者は、楽しみながら書いていますので、他の人が見ると寒いだけの小説の可能性が高いです。

以上の注意をお読みの方がみが閲覧をしてください。

鉄板の始まり

「俺が、、、俺が、、、神だッ！」

白昼夢を見ていたような、あやふやな記憶を手繰りよせながら、自分の最期を思い出していると、視界全体を覆っていた霧が晴れていた。

そして、その中心にはガッツポーズ？らしきポーズを決めながら、こちらを自信満々に見ている、神？が居た。

初めての神？との遭遇にシゲシゲと感心していると、期待の籠った眼差しを向けられている事に気がつく…。はて…？

「おいしい？そこは嘘だッ！とか、神様って何さ！？とか慌てる所だろう？何故に無反応ですか？」

嘘だッ！の所だけ無駄に力を入れながら、こちらに歩いてくる神様？は、その途中に今度は、ガッツポーズから、所謂『お手上げだぜ』的なポーズを決め『やれやれだぜ』とでも言いたげに首を大袈裟に振っている。

話しかけるのもちよつと躊躇う位の、変態スメルがするけれども、目を覚まして数分、歩いたりしながら周囲を見渡したが、人っ子一人おらず、手に触れる事が出来るのでは？と思うほどの濃霧が晴れているのは、自分と変態の周りだけ…。

「孤立無援…」

「べ…別に取って喰おうなんて思ってないんだからねッ！あんたが心配で助けに来た訳じゃないんだから！仕事！そうよ！仕事なんだから！仕方なくきてあげただけなんだから！」

と表しても過言でもないような濃霧に辟易してもいたので、ぼーっと眺める事しか出来ない。寧ろ進んで声を掛けたくは無い。

「済まないな！久しぶりの人間との会話で、ちょっとテンションが拳がってしまっって見苦しい所を見せてしまった！」

一寸……？と突っ込みたいたところだったが、またぐるんぐるん回られても困るので、飲み込んでおくことにする。

「それで、俺は、これからどうすれば良い？」

「そう！それ！それなんだよ！多忙すぎて、机と椅子に同化するんじゃない？って位、忙殺！文字通り死に掛けてた俺が、今！このフリーダムを満喫出来るのは！この事態を改修する為にきたのだよ明智君！」

そう言いながら感極まったのか、神？は、天を仰ぎながら『矢張り自由は、イイ！』『机と椅子が恋人！？フザケンナ！パツキンボイン天使のねーちゃんが居るのに手が出せない！？神は死んだのか！？』等と言いはじめる。子供には見せてはイケない図の一つだろう。そんな放送コードに引っかけりそうな、神？はスルーして話を進める事にする。

「つまり、本当に在るかは、知らないが天国にしる、地獄にしる貴方が連れて行ってくれる、と」

神が居るのだから、まあ天国はあるのだろう。丸つきりフィクションや宗教の世界だと思っていたのだが、現実に在るよ！と突きつけられるとどう反応したら良いのか困る。しかし、神のお迎えという位なのだ、VIP待遇を期待しても良いのだろうか？

「うむ、本来なら魂の選別で、どちらかに別けられ輪廻転生の順番が来るまで過ごす事になるのだが…。」

私の問いかけに、何も無かったかのように振り向いた、神？は意味ありげな笑みを浮かべながら、丹精な顔の前で指を『な・の・だ・が』とでも言いたげに振っている。押し折ってくれようか…。

「な・の・だ・が！通常、死んだ場合に現れるのは、ここでは無い。君も日本人なら、聞いたことがあるだろ？『三途の川』と呼ばれる物を、その川岸に現れるのだよ。普通はね…。」

意味ありげに『ふふふ』と微笑む姿は、二次元から抜け出たように不確かで、それでいて現実味を帯びているような、不思議な印象を放っている姿と相俟って神々しさを感じる。かもしれないが、ファーストコンタクトが失敗に終わっている今、滑稽にしか見えなかった。

一目惚れとは、第一印象の格好の良さだよ。と初恋を失敗に終わらせ落ち込んでいる私に、祖父との馴れ初めを盛大な惚けを交えて話してくれた祖母の言葉が思い出される。凜とした祖母が惚ける姿は、無慈悲に傷心の私に、一撃をくれたのだから忘れようが無い。

「では、何故、君が此処に居るのか？それは、だね。」

思い出に耽っているのをどう捕らえたのか、ドンドンと神？は、芝居がかっていつている。既に当事者というより、第三者的な視線になっってしまったっている私の個人的な感情としては、親しい友人が自信満々に見せてきた、手品の種を知っていて、どう反応すれば良いのか…という葛藤に、似た感情が渦巻いている。

そんな自己分析に、思考を割いているのを尻目に、神？の演説は佳境に入ろうとしていた。

途中、現在の仕事場の愚痴や世界情勢の不安や巔頂の野球チームの不信などに言及しているのは、矢張り、校長然り、社長然り、偉い人は話が無駄に長い事の証左なのだろう。

「で、在るからして！この『白亜の空間』にやってくる人は要するに、世界の迷子なのである！『白亜の空間』って俺が付けたんだけどどーよ？」

「微妙」

何処から何処までもが、濃霧で真っ白だから『白亜』は悪くは無いと思うが、安直過ぎる。

「……。まあ良い、前衛芸術も評価されるのは、時間が掛かるからな。さて、ここまでの話で質問はあるか？」

「要約すると、此処に来る人間は、差異はあれども『世界』という枠に囚われない、要らない子だから、輪廻転生という世界のシステムに弾かれたと……」

「少し自虐的な表現だけど、大まかに言えばそうだな。」

白亜の空間というより、魂の墓場だろうか？

墓場に送られる程、波乱万丈な人生を送っているとは思わないが、それは関係ないのだろうか？

色々と疑問は尽きないが、大事なのは『これから』である。終わってしまった過去は、諦めてしまおう。私の存在を消すというのなら、それも由、既に一度死んだ身である以上、諦めるのは容易い。

「だが、状況を鑑みるに、何かある……っか」

「おふこゝす。思考を読んだ訳じゃないが、想像通りで間違いないと思うぜ？『存在は消せない』これが世界のルールにあるんだよなあ。人間という存在の『魂』という形が最小単位だと思ってくれて

良い。この『魂』を昇格したのが『神』だとかの文字通り『上位存在』として考えるとその上に『世界』って言う意思の作ったルールがある訳だ」

「ふむ？では、私も昇格して『上位存在』とやらに？」

世界の意思だとか、ルールだとか詳しく聞いてみたいのだが、『それはそういうものなのだよ』と言われたら元も子も無いので黙って先を促すが、胡散臭い笑みを浮かべている神？は、『のんのん』と指を振りながら自慢げに仰け反っている。いい加減鬱陶しさが目立ってきた…。

「いいえ、、、君には、今から異世界に飛んでもらいます！！」

「！」

「テンプレート」

鉄板人生開始

自信満々で、ナニかを期待する神とやらに突っ込みを入れ、『そこはオリ主キターー！？とかじゃないの！？』などと詰め寄られたのを落ち着かせ、様々な情報をやり取りした。

まず、『上位存在』とやらには『選ばれし者』しか成れない。素質？というのが在るらしい。これは、度重なる輪廻転生で培われ芽吹くものらしく、既に『終わった物』として扱われている私は、どのような手を加えようが手遅れで、事前に察知する事も人成らぬ神の手でも無理な様で、対処法として『この世界の枠組みを超えた世界』つまる所の『異世界』に行くしかないと言う事だ。記憶を無くしてでの、産まれなおしでは無く、そのままポイっとな…。

フィクションは画面の向こう、自分とは違う所で起きているから楽しめるのであって、自分で体験するのは真っ平御免である。だから代案は無いのか？と当然問答したが、『最小単位』の『魂』は消すことも出来ず、現世に生き返す事も可能ではあるが、結局の所いつ死のうがこの場所に来るのは、何度か実例があるので判っている以上、認められない。ので代案なんて無いよ！と良い笑顔で言い切られた。現実は無常である。

「だ〜いじょうぶだつてば！ほら、担当に拠つては、本当にそのままポイっとするけれども俺つてば優しいから！仕事増えるけどや〜〜ってやるぜ！〜って感じですよ！それに送る異世界の選定も、済ませてるから！」

「選定という事は幾つもあるのか」

「俺も知ったときは驚いたけどね『無限』というのが比喻ではなく使えるよ？」

その中から、探し出すのは疲れたぜ！と汗を拭う仕草をする、神？
を見ながら思う。

『目の前のこれ』が探した世界…大丈夫か…？

と言つ気持ちで胸一杯だ。

「さて、出来れば私の要望も聞いてもらいたい」

「む・り」

語尾に音符が付きそうなくらい良い笑顔で言う奴に問い詰めようと
した所で、気がつく。

周囲が…明るい？蛍のような光が揺ら揺らと上に向かって登ってい
く。

「もう、送り出しちゃってるし！いや〜最初に言ったとおり仕事が
溜まってるからさあ、あんま、長居できないしさ？だ〜いじょうぶ
だって！先も言った通りちゃ〜んと俺TUEEEEのサポートはす
るし、住めば都って言うじゃん？俺も神様家業に慣れたし君もが
んばれ！」

そんな、戯言をBGMに呆然と、身体から溢れ出す燐光を眺め、私
は『平穏な日常』を諦めた。

テンプレ乙が往くッ！

第一乙 【鉄板人生開始】

風が頬を撫でる。

そんな感触に私は、現実を取り戻す。

雲の切れ間から覗いた、目を射る太陽の光に、時間にしてどれ程のやり取りが在ったか判らないが、そもそも時間的概念は、必要では無さそうな先ほどの神？との出会いが事実だと認識する。

それは、私が少女を助ける為にトラックに轢かれたのは、夜だったから…というのもあるが、もっと確定的な事実。有無を言わぬ証拠が、太陽光を遮る為に掌を翳した視線の先にあったからだ。

白亜の城壁に囲まれた街。

小高い丘というより、小さい山と称するのが良さそうなのこの場所からでも見渡すことが出来ない。大きく広い城壁が一つの街を囲んでいた。

街と街の区切りが標識を見なければ不明確な現代の日本では、見ることが出来ない、『中』と『外』を明確に区別した作り。車らしき物は見えず、此処から見える門らしき所では、馬車か徒歩か…。

どうやら完全無欠に事実らしい。

「しかし、中世レベルとは…本当にテンプレ乙だ」

大体、あの神？の言動は少し現代チックというより俗世に染まり過ぎていて。

若しかして、近しい年代の人間だったのだろうか？少なくともインターネットがある時代のような気がする。自分も依存とまでは言わないが普通か？と聞かれたら即答で否なのだが…。

「それにしてもアレは、無いな」

一人頷きながら反芻する。あれがゲーム脳、インターネットの弊害

か…。

~~~~~

「んんんん…？」

明らかな電子音が鳴り響き、周囲に木霊する。しかも聞きなれた、私の携帯で使っているメール着信音だ。

慌てて、音源である自分の携帯電話を探すと、背後の切り株の上に鎮座していた。

「うううむ…メール受信…From神様モバイル…」

中世の世界で生きて行くのか、と諦めていた矢先にこの時代には、『オーバーテクノロジー』であろう自分の携帯電話を見つけてしまいい、なんだかなーと言う気分になり、宛名を見て更に萎える。

多分、サポートがどうか言っていたので、その事なのだろうが、もう少しやり方があったのでは無かるうか？テンプレらしく勇者補正掛けるとか、今はあれか？異世界補正とでも言うのか？

「愚痴を言っても仕方が無いっつとッ」

そんな誰に対する愚痴なのか？と取り留めの無いことを考えながら、メルメルつと携帯を操作してメールを開く。

「やあ（．．．）

ようこそ、ゴッドメールへ。

このチートはサービスだから、まず良く読んで落ち着いて欲しい。

うん、「また」なんだ。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

でも、このメールを見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない  
「ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい、そう思  
って

このメールを送ったんだ。

じゃあ、注文を聞こうか。

神様ネットへ [kamisama.co.jp](http://kamisama.co.jp)

」

「……………」

クリッククリック

「ようこそ！神様・netへ！

このサイトへアクセスした方の携帯電話は、自動的に神様・netの会員に登録され

「ご使用の携帯電話のアプリケーションが更新されます。  
それでは、良いチート人生を！」

ダウンロード 100%

勝手に登録されて、勝手にダウンロードされた…。  
投げ捨てたくなる衝動を、多大な労力を使って押さえ込みチャラ  
ーーンと軽快な音を発てた携帯を握り締めるが、ミシリとも言わな  
かった。

多大な疲労を与えたこのツールが生命線になるのだろうか…。  
一度死んで、なんの縁もゆかりもないこの世界に未練は無いが、態  
々死ぬほどの反骨精神も無い以上、便利で在ろうこれを手放すのは  
得策ではない。

そう言い聞かせ、力を緩めながら使い慣れた携帯を弄ることに専念  
する。

通話、不通。そもそも電波が0だ。  
何をダウンロードされたのか、不思議だったがそれは、アプリの欄  
に在った。

「これで君も英雄の仲間入りDA！ツール…」

ネーミングセンスが最悪だ…。

こんなネーミングセンスの奴が神の一柱になってると考えると、こちらに来たのは良いことかもしれないと思う事にして、ツールのアブリを開く。

「ようこそ、これで君も英雄の仲間入りD A ! ツール、通称K E N ツールへ！」

まず、幾つかのコンテンツを紹介しよう。」

「これが1つ目のコンテンツ、ステータスだ。

上から

君のLV 1

HP 300

SP 150

力 20

魔 20

防 20

速 20

運 20

EXP 5

装備：なし

となっている。これは、そのまま君のやっていた数あるゲームと一緒にだと思ってくれ。

因みに、基本値は才能が在る者、つまり『勇者・英雄』と言われる位の間人で10前後だ

パラメーター配分が面倒だったので20で均一化させて貰った。このコンテンツは、ステータスの確認、次のLVまでの必要E

XPが正確にわかる、そして才能ある者を越える才能を確認して貰うコンテンツになっている。

ようするに俺TUEEEの大事な部分『勇者補正』が見える仕様だな！」

「さて、次のコンテンツはこれだ！アビリティシステム！」

これは様々なスキルを付け替える事が出来る素敵システムになっている。

現状は、『経験値2倍』『剣技補正』『危機感知』『拾得金額2倍』『スキル修練速度2倍』がデフォルトで付いている。アビリティ修練度が上がり白地から青地になれば、スキル修得となり、必要アビリティポイントが減る仕様だ。アビリティポイントというのは察しの良い気味なら理解しているかもしれないが、付ける事の出来るアビリティの上限になる。占有するアビリティポイントは各種違うので、新しいアビリティを覚えたら確認すると良い。新しいアビリティの修得方法は他のコンテンツと共に後で紹介しよう。」

|           |      |      |   |
|-----------|------|------|---|
| 総AP       | 100  | 余りAP | 0 |
| アビリティ名    | 占有AP |      |   |
| 経験値2倍     | 20   |      |   |
| 剣技補正      | 20   |      |   |
| 危機感知      | 10   |      |   |
| 拾得金額2倍    | 20   |      |   |
| スキル修練速度2倍 | 30   |      |   |

「三つ目の素敵コンテンツはこれだ！」

その名も！スキルシステム！！！！

これは、その名の通り【スキル】というファンタジーな現象を補

佐するシステムだ！

君の想像する【魔法】も【技】も果ては【調合】【演奏】なども【スキル】という括りに成っている！これは、前のコンテンツ二つと違い、君の居る世界全てに適応されるルールだ。だ・け・れ・ども！どんなスキルを持つているのか？という程度しか分からず、それに対して君は、何がどの程度育っているか？消費SPの固定化？というのも判断がつくようになっていて。前のアビリティシステムと連動して使ってくれたまえ、覚える条件は様々！楽しんで探してくれたまえ！」

|       |          |      |       |
|-------|----------|------|-------|
| 剣技スキル | ファストブレード | 習熟度0 | 消費SP5 |
| 魔法スキル | ディア      | 習熟度0 | 消費SP3 |

「さて、四つ目、残すところ後二つだ。ダレずに聞いてくれたまえ。これは、二つ目のアビリティシステムと連動していると思ってくれて良い。

その名も称号システム！特定の条件を満たすことで、称号を得、そしてその称号を得ることで自動的にアビリティシステムで付ける事が出来る物が増えるという寸法だ。その条件も様々で、楽しめながら異世界ライフを送る事が出来ると言う寸法さ！」

所有称号

異世界の迷子

「さて、これが最後だ！

その名もCPシステム！！！！これも簡単、時々携帯に送られてくる神様モバイルを利用して溜まったポイントを使ってお買い物出来る俺TUEEEEEには欠かせないシステム！神話級の武器

から、ペットの餌まで！なんでも取り揃えています！でもお高いんでしょ？いいえ！そんな事はありません、原価ぎりぎりでご奉仕させて頂きます！」

初回キャンペーン 100CP

スクロールを下に降ろすが終わりが無さそうだ…。

機能ボタンが使用出来るみたいなので押してみたら、武器、防具、アクセサリー、アイテム、  
、雑貨の種別に飛べるみたいだ。

十握剣 2000CP…

マンダラ衣 1000CP…

ゴールド(通貨) 100G=1CP

エリクサーだとか、おい？と突っ込みたくなる名前が沢山在ったりしたが、取りあえず通貨と書いてあるのを100CP分交換してみた。

チン、ジャララー…ありがとうとーございましたー！

そんな音声と共に、ドジャッと片手でギリギリ持てる位の袋が落ちた。携帯の画面から…。

人目の付かない所で使用しよう…。

「さて、以上で、KENツールのコンテンツ紹介は終わりだ。

説明不足な点もあるが、ノリとテンションだけで作ったに等しいので不明な点は頑張っ

説明してくれたまえ。

補足しておく、君の携帯は、君にしか見えず、他人には唯の板にしか見えないし、音も聞こえない。CPで買った物が画面から出てきても、気にすることは無い。そしてバッテリーも大気中の魔力、君の魔力などを吸っている為切れない上に、壊れる事が無く、何処で無くしても、念じれば手の中に戻ってくるという不思議携帯になっている。

存分に使ってくれたまえ。

それで、君の勇気と、その他諸々が世界を救うと信じて！！通信を終わり！おーばー」

ブツンと音声案内だと思っていたツールヘルプが終わったと同時に、携帯を青空に向かって投げ飛ばした。

## 鉄板建築

見上げる空は、青く、広く、何処までも続いている…。  
異世界とやらの飛ばされても、空は変わらず空で、歩き続けたら知  
っている場所に、私を知ってくれている場所に着くのではないか…  
そんな感慨に耽ってしまう。

事前録音の音声案内だと思っていたヘルプが実は、神？からの通話  
での案内だったのに気がついて、思わず携帯を投げ捨ててしまつて、  
数秒後には上着のポケットに戻ってきたのを確認した。数分程そん  
な感傷に浸り、これから先の展望を考える。

レベル・ステータス・EXP・アビリティ・スキル・称号…どう考  
えてもRPG系のテンプレ乙なのだ、これから導き出される答えは、  
1つ。中世っぽいだけであり、前の世界での中世時代とは違い、脅  
威になる存在とどのつまりは、『モンスター』的な何かが居るので  
あろう。

流石に、人を殺してEXP等は貰いたくない、必要と在  
らば躊躇う訳にはいかないだろうが。

そもそも、モンスターとやらが居たとして、戦えるか？と思量した  
が、まあ駄目なら駄目で考えるしかない。得てして想像は想像の範  
疇を超えないのだから。

目下の課題は…、出鱈目に大きな城壁で囲われたあの街に行くか、  
それとも他の街を探して彷徨うか、だ。日の高さからして、常識が  
通用するのならばまだ日が落ちるまでは、時間がありそうだが、そ  
もそも他の街への道が分からない。多分、ここから見える城門らし  
き所から続いている街道らしき物を辿れば行けるのだろうが、コン  
クリートで舗装は当然されておらず、草を抜かれ土を均されてる程

度の道？を何処まで信用する事が出来るのか、疑問ではある。

更に言えば、現状の装備は、携帯と携帯から出てきた1000ゴールド（1枚が五百円大の金貨だった）それに、斜め掛けが出来るトートバックだけ。バックの中身は無くなっているし、尚且つ、カーキ色のジャケットに白のYシャツ、黒のジーンズに少し軍用チツクなブーツという講義に出た後そのままの格好だ。街を練り歩くならまだしも、何時着くのか分からない旅は無謀すぎる。

「常識的に考えて、あの街に行けと言う事なのだろうが…」

眼前に分かりやすくあり、尚且つ活気が在りそうなあの場所が所謂『私の世界』が始まる場所なのだろう。

だが、このまま進むのも癪ではある。そんな微妙な反骨精神と、あの神？に対するこれまた微妙な不信感で少し躊躇ってしまふ。常時だったのならば、このまま居れば、『モンスター』みたいな物に出会ってデッドエンド。他の街に行くにも地理も知らず、少なくとも日本より治安が悪そうなのこの世界で何も知らない状態で無事に辿り付ける可能性は低いのだから、あの街しか選択肢は、無い。それを邪魔するのは、あの神？の妙に高いテンションが心配なのだ。彼は、多分、テンションがあがり過ぎると周りの空気が読めなくなるタイプなのだろう、そんな彼のお勧めスポットなど怖くて行きたくない…というのが偽らざる心境だ。

「はあ…案ずるより産むが易し、か諦めよう…」

結局のところ、一番安全な所と一番危険そうな所が一緒になったところ、アビリティの危機感知に期待をしましょう。

そう結論付け、色々な事を諦めながら『よっころしよ』と座っていた、携帯を見つけた切り株から腰をあげる。

~~~~~

「ん…メールか…」

「From 神様モバイル

件名 クエスト発生！」

内容 迷宮都市郡「ローランド連合国」に潜入し、「シーカー」登録を済ませるのだ。

「ローランド連合国」とは？大迷宮「リンバス」を中心に出来上がった幾つか

の勢力郡が集まり、戦争と協定の果てに出来上がった連合国である。

商業資格を持っている商人以外は、入国に100Gな為、城壁の外はスラム化し

ているが、城壁内、外も警備兵が警邏をしている為、治安はそれ程悪くない。

契約CP：10CP 報酬CP：20CP 受注しますか

？ はい はい 』

「……はい、しか無いぞ」

CPを貯める方法というのは、コレの事なのだろう。しかし、あの街に行かせる気、このクエストを受けさせる気が満々で、あの街で起こるであろう『クエスト』に頭が痛くなる。

「取り合えず、行くか」

不条理なメールだが、助けてくれては居るのだから無碍には出来ない。

二つ有る『はい』のコマンドの一つをクリックして、『クエスト受領しました』の音声をBGMに白亜の城壁を目指して、私は、小さな山を下っていく。

テンプレ乙が往くッ！

第二乙 鉄板建築

携帯の時計から判断するに一時間程で山を降りきり、そこで自分の

体力等が変わっている事に気がついた。

CPで買ったゴールドは1000G、100枚程度の金貨だったの
で1つが10Gなのだろう、1000枚よりは少ないと言え、結構
な量になる。それを鞆に背負って休憩を挟まず、降りきって息切れ
一つしなかった。鞆の重さも気にならず、と来れば更に異常さが際
立つ。

運動が不得意という訳ではなかったが高校を卒業し既に3年近く、
まともな運動と言えば、夏に海に行ったりと、普通の人間と大して
変わらない生活だったのだ、この体力と金貨を背負える筋力は神？
の言うステータスの恩恵なのだろう。

そういえば、少し悪くなり始めていた視力も良くなっている…。

「至れり尽くせりだな」

白亜の城壁を見上げながら呟くが返事は無い。

大きな掛け橋が降りている左右で門番らしき人間が、入国者の相手
をしているのを眺めながら今後の展望をより詳しく組み立てていく。
この至れり尽くせりの現状が、そもそも『何時まで続くのか？』と
いう事に思い至ったのだ。

死後の世界、『上位存在』とやらに『時間的概念』が通用するの
か、判別が付かない

しかし、神？が言っていた『大抵の場合は異世界に送ってそのまま』
というのが本当たとすれば、現状は、文字通り『神の戯れ』に過ぎ
ないのだろう。

あの人間味があり過ぎる、神？が何時飽きるかも分からない。

仕事が忙しいだとのた打ち回っていたのだから、こちらに手を掛け
る暇が無くなるかもしれない。

そして、

携帯とそれに通ずるツールが無くなったら？

CPシステムが無くなったら？

それまで上げたLVなどが消えないなら、特に困りそうでは無いけれども、現状はLV1で何の身分も保証も無い身である。

英雄願望も無ければ、人並みに暮らせれば良いと思う、出来れば最後の心配も無く…だが今の状態では、CPを全額ゴールドにしても一生は、暮らせまい。

ツールが使える現状で、ある程度の生活の糧を確保する必要があるだろう、惨めな余生を送らない為に。

「その為にも、シーカー…テンプレ乙だがそれが一番手っ取り早い
か？」

メールの文面とテンプレ的に考えて『大迷宮リンバス』とやらを攻略する人間の事を指すであろう、シーカーという役職？に付けという指示を考えると、まあ、そういう事なのだろう。

「潜れ…と」

ゲームや小説ならば、良かろう。

だが、現実問題、薄暗い洞窟の中を何十階も何時間も、上がるか下がるかすると考えると常人の所業では無いと思うのだが…。

「あ〜〜君？次、君の番なんだが？」

「嗚呼申し訳ない、初めて訪れるもので勝手が判らないのだが…」

「成る程な、商業手形持つてないなら入国には100G掛かるぜ？」

これをお願いする、と予めポケットに取り分けておいた金貨10枚を私より頭二つ大きい、真つ白に輝く不思議な甲冑を着込んだ門番に渡すと、隣の小屋の中にいる人間に渡して何かの装置に掛けているが、大丈夫なのだろうか。少し不安だ。

「と、確かに受け取った、手続きが在るからこのまま橋を渡った所で頼む」

平静を装って、ありがとうと告げながら先を進むが、背中には嫌な汗でびっしょりだ。

これは、通貨偽造になるのだろうか…？

そんな事を「駄目だ駄目だ！入国金が払えない人間はどうやっても入れねえ！」という怒声を背に考えながら不審に思われない程度に足を速める。

「こんにちは、ようこそ迷宮都市郡『ローランド連合国』へ。歓迎致します。

先ずは、こちらの書類にご記入ください。」

足早に付いた城門の入口と出口の間に設置されている受付に並び、挨拶と共に用紙とペンを差し出される。

ペン…？紙…？というか日本語を喋って、漢字と平仮名？

遅ればせながら、一番大事な所が抜けていた事に気が付いた。

先の甲冑の兵士や並んでいた人たちもそうだが、この受付の女性も髪の色や目の色が全く持って日本人じゃない、『異世界』だからと

納得していたが、その『異世界』なのだから言葉が通じない可能性も在ったのだ。

日本語しか喋れない人間が、ホワイトハウスに乗り込むかのような無茶をしていた事に今更ながら気が付き、橋を渡った先に居た警備兵の持っていたハルバードを思い出し、止まった筈の冷や汗が再び出てきた…。

テンプレ乙と流していたが、言葉が通じないのも在る意味テンプレなのだ

「あの…？どうかしましたか？」

「あ、いや、この出身地というのが、私は村というより集落と表す方が近い所で育ったので、どう書けば良いのかと思ってね…」

心配げに、こちらを伺う薄緑色の髪をした受付の女性の視線から逃げるように、名前、年齢、と書きながら誤魔化すようにそう言う。

「そう…なんですか。出身地は空白で構いませんよ。私が処理しますます！」

「ああ、助かるよ、ありがとう」

薄っぺらな嘘だったがどうやら信じてくれたようで、一瞬暗い表情を見せ、それを振り払うかのように殊更元気に振舞う受付の女性に、少々罪悪感を感じながら、入国理由の項目にあった『シーカー登録』の部分に丸を付け、不備が無いかチェックし渡す。

「はい、不備はありません。こちらの冊子の通り、国内滞在中に幾つか注意があります。これが守られない場合は強制退国と入国禁止措置などの罰則がありますのでご注意ください尚、都市内の諸手続きの大部分は、そちらの冊子の最後のページに載っています、都市地図に記載されている『都庁』で可能ですので、何かございましたらご利用ください。」

「この冊子は貰っても？」

「はい！入国金の一部で支払われる形になっていきますので、お持ちになってください。曆様は『シーカー』登録ご希望という事ですので、直ぐに登録されるのでしたら、そちらの大ドアから出られて、真っ直ぐ進んだ場所に『リンバス』の入り口があります。その近くにあります、大きな白い建物が『探索者協会』になっておりますのでご利用ください」

「丁寧にも、ありがとうございます」

「いいえ、それでは、宮部様の『ローランド連合国』での生活がより良い物になることを祈って居ます。いつてらっしゃいませ。」

「私もそう願っているよ……」

打てば響く、と言う様な女性の対応に感心して、「中世」と思っていたのは大間違いだと頂いた『ローランド王国の進め』という冊子を捲りながら、足を進める。

『異世界』だからこそ、なのだろう。文明の進み方に対する、私の常識との大きな隔たりが見えるのは、学ぶことがこれから沢山あると考えると億劫になるけれども、完璧に違う国に来たのだと考えれば『異文化に触れ合える楽しみ』というのにもなるだろう。

『異文化』というのが即ち『異世界』の『異』であり、この旅行先で骨を埋めるということに目を瞑れば、楽しみも見出せるだろう。

「人生楽あれば苦あり、だな」

先ずは、あそこの木陰のベンチに座って冊子を熟読しよう。

「兄さん、兄さん！そのカッコいい兄さん！」

冊子を読んで、簡潔ながら確りした賞罰体制に感心しているとそんな風に声を掛けられた。

明らかにこちらに向けて、声を掛けているのだが、ベンチには私しか座っていない。ので、はて？と思いつつも冊子から目を離して声ができる方を見る。

「おお！そうそう！そこのお兄さんだよ、先からその冊子見てる所をみると初めてこの街に来るんだね？」

「ああ、そうなる、今まで故郷から出たことが無かったのにな、行き成り牢屋に放り込まれたり追い出されたら堪らないから目を通してているんだが、貴女は売り子かね？」

「そーだよ！この街に来たら一度は飲まないと損をする！『ローランド移動喫茶』のメイさんだい！」

「喫茶というのは誇大広告のような気がするが…」

「酷いッ！この春の陽気の中、木陰で読書をする良い男を見つけたと思って声を掛けたら、傷つけられたッ、オーイオーイ」

何時の間に現れたのか、屋台が出来て居た。

その店主であろう、赤毛の女性に声を掛けられたのだが、喫茶というより、運動会や祭りで見かける露天だろう。と思い突っ込んだら、思いっきり地雷だったようだ。

しかし、顔は美人だが、態度というかリアクションというかテンションが残念な感じた。

ネーミングセンスも神？に通じる物があり、頭が痛くなる。

「あー、そのなんだ、飲み物を買うから業とらしい泣き真似を止めてくれ…目立っている」

「そう？いやー悪いね！お兄さんカッコいいだけじゃなくて、気前も良いね！」

崩れ落ちて、『イヤイヤ』とでも表そうか？目元に手をやり泣き真似をしていた女性は、目立つのだろう、そう多くは無いが、少なくとも無い人数が門から出てくる以上、少し離れている場所にあるベンチとはいえ、衆目の目に晒されたのだが、件の女性は何も無かったかのように立ち上がり、笑顔を振りまく。

矢張り、女性は怖い…。

「色々言いたいことはあるが、取り敢えず冷たいお勧めの飲み物を頼む」

「はいは〜い、じゃあお勧めと言えばやっぱりコレだね！産地直送のサルタオレンジの絞りたてオレンジジュース！1ゼニーだよ！」

サルタというのは地名か品名だろう、オレンジというのは、売り子の女性が出した350ml程度の大きさのビンに入っている液体の色から、知っている物と変わりそうにないと推測できるが、ゼニー…？通貨単位だろうが、持っていない。

「あ〜済まないが、コレしか持ってないんだが大丈夫だろうか？」

「あ、ゴールドね！お兄さんおつかねもっちゅハイ、じゃ〜お釣りの9ゼニーと特製オレンジジュース！」

CPシステムで出てきた通貨がゴールドだけなので、少し焦ったが良く考えれば1枚が10ゴールドなら端数はどうするのだ、という話だ。と自分で納得しながら、返ってきた9ゼニー（9枚の十円玉大の硬貨だった）とオレンジジュースのビンを受け取る。

「どう？美味しいよね〜？美味しいぞ〜って言っちゃえ〜」

「普通に美味しいから、返答に困る」

10ゴールド硬貨1枚が1ゼニー硬貨10枚なら、最低単位はゼニーなのか？と思いつながら木のコルクを抜いて、喉を潤すオレンジジュースは、普通に美味かった。

お歳暮で買った数千円もするフルーツジュースの瓶詰めセットが、これまでの飲み物の最高位に存在していたが、これはそれに勝るとも劣らない味だ…。

「え、ああ、〜、そうでしょ！そうともう！私の特製ジュースなのでから、当たり前じゃん！」

「うむ、言うだけある、23年生きて来て一番美味かった飲み物と為を張る、ありがとう」

照れた様子で、誤魔化そうとする売り子の女性に、飲み終わったビンを渡しながら賞賛する。よく考えたら、化合物が多く含まれている食品に囲まれた前の世界では、食べられないような天然物の食材で作られる物が食べられるのだ、特段の美食家という訳ではないが、衣食住足りて礼を知るとい言葉もある、食べ物が美味しいという可能性は、明るい未来にも等しいだろう。そんな事を気づかせてくれた事も含み、礼を言うと、ビンを受け取った女性は顔を真っ赤に

この世界にも、人の数だけ人生があり、星の数だけドラマがある…。
そう考えると、失った世界は、寂しいけれども、進む事が出来るだ
ろう…。

この見上げた空の下、何処かで誰かが物語りを紡いでいくのだろう
…。

「メエエエエデイイイイーーーーーツク!!!」

「テンプレ乙」

鉄板建築（後書き）

感想にございました、十握剣ですが、諸説様々な漢字の表記で、物語の幾つかに登場する為、一つの剣ではないというのが通説です。

前回登場した、十握剣ですが、別名伊都之尾羽張と同じ読みの剣ですが、違う逸話で登場した剣の漢字となっています。

都布御魂、天羽々斬、伊都之尾羽張これらは、振るわれた舞台が違います、どれもツカノツルギ という名前なので、十束剣と呼ばれています。

要するに、力を持った十本の剣があり、その内の別称が無い剣の一本が十握剣と書き記されているそうです。

ここで、表記名称が違うだけで一本の剣ではないのか？という疑問がありますが、とある説話には、釣り針を無くし仕方なしに剣を錆潰して、針を作ったという事から、それぞれ別の剣だ。という事にさせて頂きました。

感想ありがとうございました。

鉄板登録

幾つかのドラマが生まれ、幾つかの命が失われようとしていた広場を、巻き込まれる前に抜け出し、衛生兵らしき担架を担いだロープ姿の人たちとすれ違いながらも、誰に呼び止められる事、無くすんだ。

私が悪い訳ではないのだけれどもな。そんな事を考えながらも、街中での騒動を起こしたら最低2日からの無料社会奉仕に順ずること、また悪質な場合は、禁固1年〜後、国外退去と冊子に書かれていた以上、どの程度が『騒動』に当てはまるかはまだ判別が付かないが、一日目で、国家権力のお世話になるのは、御免だ。

「おお、これが『大迷宮リンバス』の入り口か…大きいな」

入国審査を受けた城門からも見えていた、大きな宮殿風の建物、これが『リンバス』とやらの入り口がある建物らしい。

太陽の光を受けて、輝く不思議な建材を使ったその建物は、大昔から在り既に5000年程は軽く経っているそうだ。最初は、この世界で大多数に信仰されている、豊穡と癒しの女神『メデイナ神』が降り立った場所として『メデイナ教』の聖地兼聖堂として使われていたらしい。だが、ある日、高名な司祭が女神メデイナの啓示を受けて、開かずの扉だった場所を開くと無限に続く迷宮が広がっていた…

そんな成り立ちらしく、女神の試練だ！と囃し立て、時の僧侶たちは拳って『リンバス』に

挑み、宝を持ち帰る者も居れば、時に命を落とす者も居ながら、力

を付け、この世界での勢力を拡大していった。というのが背景にあるらしい。

しかし、周りに存在した幾つかの国家が、優秀な僧侶を大勢抱え、女神の恵みだ！と救いを求めにやってきた人間を困い一つの国家に成りつつある、それも自国にも信者が増えつつある国家だ、それに危機感を持ち、結託して侵略を始め、軍VS迷宮で鍛えられた僧兵の熾烈な戦いを繰り広げたが、時の司祭は、無闇に失われていく命に涙を流し、降伏。

その思量深さに心を打たれた、施政者達は改心し、今後このような事がないように、この地を中心に一つの連合国として纏まる事にした…。

突込み所や施政者と司祭の思惑が透けてみえる気がするが、確証も無いし、どうでも良い戯言に過ぎないのだが、その戦争と、後の幾つか戦争で大規模な魔法を食らっても欠片も崩れなかった不思議素材で出来た宮殿は、数千年の時を思わせないほど、威風を醸し出している。

そんな宮殿を望める場所に経っていた『探索者協会』と偉く達筆で書かれている看板を掲げる大きめの建物に感心しながら入っていく。

テンプレ乙が往くッ！

第三乙 鉄板登録

「お客様本日は、『シーカー』登録をご希望ですか？」

「嗚呼、登録を頼みたい」

混雑している役所風の内装の中をどうにかこうにか、『各種登録手続き』と書かれた標識の窓口に辿り着き、幾人か並んでいるのを待ちながら。

探索者と呼ぶ割には、武器を携帯している人間が見えないな…、髪の色が混在しすぎて目が痛くなってきた…。などと益体の無い事を考えていると何時の間にか自分の番が来たらしい。

「それでは、まず、登録料が400Gになります」

四十枚の金貨をバックの中に入っている袋から取り出し渡すと、ありがとうございますと言いなから、受付の女性は、入国金を払った時のように金貨を手近にあった機械に掛ける。

「入国の際にも気になったのだが、その機械は？」

「こちらですか？こちらは、ゴールド、ゼニーの悪幣、つまり銅などを混ぜた偽造通貨を見つけ出すのと、同時に数量計測をしてくれる便利な機械です」

大きな金額を扱う為、一応の処置ですのでお気になさらずに、と笑顔で応対してくれるのは、良いのだが、偽造と言えば偽造なのか？と思わざる終えず、複雑な心境だ。

何気なく済ませていたのだがカルチャーショックを与えてくれた、メイというジュース売りの女性にもその金貨で支払いをしたのだが、今更だろうか…？

葉っぱに戻る訳でもないだろうし、通し番号が在る様でも無いので、『神のみぞ知る』と謂う事にしよう。

「はい、丁度400G頂きました。では、こちらの用紙にご記入ください」

そういつて手渡された用紙は、入国の際に書いたのと似通っていた。しかし、年齢と出身国などの記入する所は無く、名前と入国日の欄

だけで、後は簡単な設問

『学園の通学歴の有無』 『従軍歴の有無』 などのチェック項目が在るだけだった。

「あゝ済まない、今日は何月何日だったかな？」

「4月9日 月曜日です、若しかして宮部様は、入国してそのまま来られたのですか」

「ん、嗚呼そうなる。手持ちの金も心もとないし、『シーカー』登録をすれば、二級住民扱いになると冊子で見たものでな。二級住民というのがどの程度の扱いかは、知らないが、身寄りも無い、身分の保証をしてくれる人も居ない、それに比べて少しでも扱いが良くなるのならば、資金が尽きて右往左往する前に登録しておこうと思つてな」

そう質問に答えながら、頭の隅で、（そういえば、携帯の日付も4月9日月曜日だったな、ちゃんとリンクしているのか？）などと考え、サクサクと書類を仕上げて行く。

「ありがとうございます。え〜っと、宮部様は、学園の通学、または、従軍の経験も無い為
、無料で戦闘指南の講座を受ける事が出来ますがこの場で申請致しますか？」

「ふむ…（このチートとこちらの世界のレベルとの差異が分からないから、下手に強かったら目立つ可能性が在るな…）（戦闘指南と言つのは具体的にどんな事を？後、ここで申請しなくとも後日というのは可能なのかな？」

『勇者』クラスの初期ステータスと言っていた。その力がどの程度凄いか、判断が付かないので出来れば人目に付く前に、この世界の『普通』を知りたい。大きな力には大きな責任が伴うのだ、『神の戯れ』で貰った力だが既に私の力でも在るのだから存分に振るう心算では、在る。

けれどもその力の大きさが分からないのに、どれ程の責任を負う覚悟をすれば良いのか分からない状態で、目立つことは避けたい。そう考えながらポケットの中に入れた掌で携帯を弄ぶ。

「申請自体は、こちらの受付で申し込みが何時でも出来ます。ですが、受講資格というのが決まっています。『リンバス』の10階層踏破、若しくはレベル5を超えた方は受講資格を失います。料金をお支払い頂けますと改めて受講は出来ませんが、お値段が…その結構お高く500Gとなっております。」

「登録料より高いのか…」

「はい、これは先ほどのご質問にもありました講座内容というものにも関係あるのですが、内容が『リンバス内部における基本戦闘』と『リンバスの歩き方基礎』となっております。『リンバス』に降りての実習になります。ですから、無料保障中の講師の方に対する報酬は、協会から出ますが…」

「成る程、保障期間外だと、講師に対する報酬の自己負担が必要だと」

「そうなります、例え1階層だとしても油断をすれば命取りになりますので、報酬のほうもそれなりに…」

確かに、丸っきりの素人を連れて命の危険が在る場所に勉強をさせ

に行くのならば、それなりの給金を貰わねば割に合わないだろう…。

「講座のほうは、また後日申請させて貰うよ、態々教えて貰ったのに申し訳ない」

「いえいえ、お仕事ですし、宮部様の身の安全を考えると教えない訳にはいきません！」

書類に書いていた名前を見たのだろう、何時の間にか敬称をつけて呼ばれているのと、少し大袈裟だが私の安全を考えてくれていていると思うと、先程会ったばかりなのに少しかだけ親しく思え暖かい気持ちになる。ガッツポーズまでして心配してくれるのは、どうかと思うが…。

「ありがとう。余り心配を掛けないように安全に行くよ。それで登録はこれで終わりかな？」

「あ、、、はい、焦らず頑張ってください！私で良ければ何時でもご相談に乗りますから、、、えっと、登録ですね！書類の方はこれで終わりですが、重要なのがひとつありますので少し待っていてください！」

礼を言い、先を促すとガッツポーズはやはり恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてワタワタと手を振りながら、待っていてくださいねー！とすぐ近くの扉に走って行く。

「そんな短いふわふわのスカートで走ると…」

何がと言わないが、見えそうで見えなかった。

しかしこれまた改めて考えると、服や建物も結構な文化レベルだ。

服は、結構複雑な作りをしている上に、彼女が着ていた制服だけでなく、周りを見渡しても『ファンタジーチック』では、あるが『コスプレチック』にはなっていない位の生活観がある服装に見える。建物はもつと凄い、普通に現代の市役所じゃないか？と謂わんばかりだし、もつと凄いのが中に浮いている『光る玉が入ったシャンデリア』だ。魔法アイテムなのだろうか…。

「はあっはあっお待たせしました！」

「ん、ああ、急いでは居ないから、息を切らせてまで走らなくて良いのに…」

余裕のある大人の女性という雰囲気が一変して、シヨートカットの赤毛も相俟って元気な女の子という感じになっている。まあ女性は幾つ物の顔を持っているという事だろう。

「あう…入国してそのまま来られたと先程仰ったので、宿泊所を探したりでお時間が掛かるかなと思ひまして…」

「ん…嗚呼、そうか宿も取らないとだな、ありがとう忘れていた。良ければお勧めの宿などあれば後で教えてくれないだろうか？」

「はい！あとでお教えしますね？では、取りあえず登録をすませてしまいましょう。こちらのカードを私がいっと言うまで、両手で挟んでください。軽くで大丈夫ですよ」

そう言つて、差し出されたのは丁度私の掌くらいの大きさをしたメタリックなプレートだ。

それを、言われたとおり両手で拝むように挟むみ数十秒すると、少し暖かさを感じ、数分すると青い燐光が現れた。

「はい、ありがとうございます！登録終了です。こちらのカードは協会内での手続き、リンバス内部での『ポーター』の利用時など多種多様に必要となります。宮部様が先程仰ったように二級市民権も同時に兼ねていますので、宮部様にはこれより『ローランド連合国』及び『探索者協会』に保護される権利と、施政されている法律に順ずる義務が発生します。大まかな法律は、入国の際に受け取った冊子をご覧ください。その中で『シーカー』だけに課せられる法律だけ、ご注意ください。1つ、『シーカー同士の中で決闘は禁ずる、決闘は探索者協会を仲介し、指定の場所のみで行う事』、2つ『シーカーの街中での武器の所有を禁じ、防具、アクセサリー以外は『バックパック』に収納すること。但し、鍛冶屋、オークシヨン、武器屋、防具屋などの特定施設では、これは、適用されない』3つ『シーカーは、毎月ランクに順ずる、納付金を税として協会に収めること』4つ『シーカー同士のリンバス内で起きた全ての事柄に協会は、責任を取らない』以上の4つが守られている間に限り、協会が身分を保証するという形で、国から二級市民の権利が保障されます」

「質問など何かございますか？と小首を傾げるのを見ながら、考える。

重要なのは、『バックパック』と『ランク』に『納付金』それと二級市民権の権利内容だろうか…？と思ひ、それを伝えると、新しい冊子を取り出し、ページを開けてこちらに向けてくる。

「先ずは、二級市民権ですが、こちらは簡単です。裁判を受ける権利、起こす権利が付きます。これが無く、問題を起こして警備騎士団に捕まった場合、有無を言わず、強制労働または、法律に順ずる形での罰則があります。被害に遭った場合でも、まともに取り合

つてくれません。因みに、二級市民権を持っている方が、身元引受人になつてゝという形も取れるので家族で入国した方でお一人だけ代表で取るという形もありますね。ただその場合、取つてないその他の方が被害に遭つた場合意味がありません。市民権の購入は、二級市民権が2000G、一級市民権が20000Gを払えば『都庁』で購入できます。宮部様の場合は、『シーカー』登録中は二級市民権を有していますが、登録を解除されたと同時に、権利を無くします。ですのでご注意ください」

二級市民権とは、最低限の保障制度なのだろう。この都市内で最低保障された生活をするには、入国料に市民権購入の代金が必要になるのか……。物価というものが、まだ把握できてないので高いのか安いのか判別が付かないが、入国審査の場所で、追返されてた人も居るのを思い出すと、安くは無いのだろう。

内容を吟味しながら、先を促すと、白く細い指が冊子の違うページを開き、指差す。

「次に、『ランク』と『納付金』を一緒に説明しますね。こちらの冊子に書いてあるように『ランク』に準じて納付金が変わります。こちらの納付金を毎月収めて頂く事によって、協会内部の幾つかの施設、諸手続き、『ポーター』が無料でご使用できます。」

そう言いながら、指をすすーとずらして行く所を見ると『ランク1』から『ランク13』と書かれている表と、その横に納税金の額が書かれている図がある。

『ランク1』ならば毎月100G、それが2倍ずつあがっているが、金額からして1が最低ランクで13が最高ランクなのだろう。リンバス内でどれ程稼げるか、この判断も付かないがそこまで無茶な金額ではなさそうだ。

しかし、ここまで聞いて一番何が判ったか？と言うと常識という物差しは重要で、何を判断するにも物差しが無ければ、曖昧になってしまうのだな。と言う事だろう。

「ランクは1が最低で13が最高になっており、10位から上になりますと幾つかの特別な権利が発生します。権利の内容については、ランク10位以上になるのは、難しいので今はご説明はしません。ランクを上げるには、『到達階層』この一点のみです。宮部様は、現在ランク1ですのでこれを2に上げるには20階層到達が必要になります。階層の到達記録は、先ほどお渡ししたカード、私たちは『タグ』と言っていますが、そちらに記載され、協会の方でも確認ができます」

そう言われて、先渡されたままのメトリックのプレートを見てみると、

『宮部 暦 Lv1 ランク1 到達階層0 習得スキル ファストブレード デイア 』

と書かれていた。渡された時は、唯のプレートだったのだが…。魔法的な何かだろうか。

「『タグ』に記載された情報は、協会の統合システムにも記載されている為、随時更新されています。そして『タグ』の情報はこちらの『サーチブック』でも閲覧出来るのでPTを組む場合にも便利ですよ？」

笑顔で渡された大き目の辞書をあけて見ると…。

「まさに…ファンタジーです…」

21世紀では、創作物の中にしか起き得なかった現象、『淡い燐光が映像ディスプレイになるよ!?』を体験してしまつて、普通にテーションが下がつた…。

車じゃ無くて馬車使つてるのに、このギャップの差は何…。

中世レベルか?とか、常識が違ふんだよ…とかそんな段階じゃなくて…

なんか言葉に出来ない、現代科学が負けた感が凄くすると、ちょっと上から目線で見ていたような、ファンタジーに対する言いようの無い罪悪感が混じつた不思議なもやもやが胸の内に…。

「あの…?大丈夫ですか?」

「ああ、現実は何時だつてこんなこと筈じゃなかったという事ばかりなんだよな…」

顔に手を当て、天井を見上げる私に心配して声をかけてくれる彼女に対する返答は、そんな訳の判らないう台詞だつた。

非常な現実になんか立ち向かい、『サーチブック』の操作の仕方を教えてもらったのだが、これは特段難しい事は無かつた。書店などに置いてある検索システムに毛が生えた程度だろうか?検索の条件指定なども細かく出来、便利ではあるが、どの程度の能力を自分が持っているか、と言うのが判断が付くまで、ソロプレイは決定して

いるので、使い道はまだ無さそうだ。

その際、受付女の名前がマリエルという名前で、ランク2のシーカーでもあるのが判ったのと、このシステムの操作に結構蹟く人間は多いという事、そしてシーカーの総数が2万人近くに上る事が、判ったのが収穫だろうか。

「ランクに付いて、というより『納付金』と『タグ』に付いての補則になりますが、納付金の納税は毎月1日に行われています。2ヶ月納税が成されない場合は、資格の剥奪、そして強制労働などの措置が取られますのでお気をつけください。納税方法は、こちらに来ていただくか、『タグ』からの自動引き落としをしていただけますが、窓口での納税は、お時間が掛かる可能性が高いので、自動引き落としのお手続きが好ましいと…『タグ』の補則もこちらと関係がありますが、そちらの『タグ』をこの建物の前にあります『連合国銀行』にもって行きますと、『タグ』に口座システムを付加でき、『タグ』でお買い物出来るようになって便利ですよ？」

タグを使つての承認システムですと、ご本人以外が触ると使えなくなりですから…そういつてマリエルが差し出したタグを受け取ると、マリエルの指が離れる直前まで記載があった筈のプレートが、メタリックプレートに戻っていた。少し違うのは、ランタンの絵が描かれている事だろうか？

「このランタンの絵は、協会のシンボルマークです。これが記載されているプレートは使用済みという印ですね。登録した本人が触れている間にしか表示されません。ですので偽証などは不可能なシステムになっています」

そう付け加えるマリエルに、プレートを返しながら、思った。

ファンタジー…すげえ

引き落とし設定にするには、どちらにせよタグで口座を作らないと駄目なので、バックパックの説明を受けたら、その足で行くことにする。

「『バックパック』は、協会指定の雑貨屋などで購入する事ができる鞆です。マジックアイテムに部類される物で、幾つか種類がありますが、大きさ、重さの関係なく入れる事ができるアイテムになっています。便利なアイテムですがそれなりのお値段がしますので、最初に皆さんが目指すのがコレですね！これが購入できないの武器は、宿屋に置いておく等の処置が必要です。装備したまま、歩き回っていたら逮捕されてる可能性が在りますのでご注意ください」

ランク1のタグを見せれば、宿屋とリンバスまでの道でしたら問題はありませんが、途中で雑貨屋などに寄るのは難しいですねーと朗らかに笑うマリエルに、指定の雑貨屋でお勧めの場所とお勧めの宿屋を、入国の際に貰った冊子の地図に書き込んでもらう。

「それでは、大体の説明を終わります。何かございましたら、窓口にいらいっしゃって下さい、宮部様のこれからの探求者道に幸がありますように…」

「ああ、そうあると私も願うよ。では、マリエルさん色々ありがとうございます、また来るよ」

そう挨拶をして、探索者協会の建物を出た所で、
~~~~~  
携帯電話が鳴った。

ああ、そういえばクエストを受注していたな。と思い出してポケットから携帯を取り出し受信しているメールを開く。

「From 神様モバイル

件名 クエスト達成!

内容 おめでとうございます。受注クエスト攻略を確認しました。報酬20CPが支払われます。今後とも楽しい異世界ライフを!

現在所持CP 110CP

」

(これは、あの神?が送っているのだろうか…)

そんな些細な疑問を持ちながら、真正面にある、探索者協会と同じくらい大きい『連合国銀行』に足を向ける。

「またのお越しをお待ちしております」

順番待ち以外は、シーカー登録してタグを持っているので、簡単に済んだ。

序に、納付金の引き落とし登録もこちらで済ませる事が出来たので、一石二鳥だった。

しかし、そちらの登録をする際に、残高が0だと無理と言われたので、200G預けて残金が200Gと90Zになってしまった。円とか同一単位で区切っていないから、面倒だな…。

その後に、雑貨屋に寄り、色々ファンタジーなアイテムを見つけたが、宿代が幾らするのか判らなかったので、『バックパック』の値段だけ見て出る事にした。

バックパックの値段は一番安いので1000G、愛想の良い店員の話では、同一アイテムと認識されるアイテムなら一くくりに、12個まで、それが20個入るのが許容量らしい。要するに、ゲームの『ふくろ』などと一緒の扱いなのだろう。

ただ剣などの、武器・防具などは『同じアイテム』の括りに入らない為、バックパックに同じ名称の剣が入っていても、装備を外す時は、ちゃんと1つ分空けて無いと困ることになると注意された。

CPを使えば出せなくは、無いが稼ぐためにシーカーの登録をしたという面もあるのだから、

どれだけ稼げるか、そもそも自分は、シーカーとしてやっていけるのか？という面を解消してCPなりを使って購入するって結論付け、手持ちが無いのでまた来ると辞した。

雑貨屋を出るときに、武器も持っておらず、完璧な初心者だとバレたのだろうか？店員の女性に『傷薬』を10個貰った。塗り薬で、切り傷、打撲、等によく効くらしい。

大学進学にするに当たって上京した当時、不覚にも迷子になってしまった時に通りがかった人に道案内を態々して貰った時に、感じた恥ずかしさを思い出したが有り難く貰った。

マリエルの紹介では、品揃えも豊富らしいので、ここを利用する事にしよう。

カランカランとベルが鳴るドアを開く。

「いらっしやい」

「部屋は、空いているか？」

雑貨屋を後にして、数分歩いた所に、紹介された『宿屋 ダンカン』は、在った。

特徴らしき特徴も無く、石造りの白い壁はホテルというよりは、見たまま『宿屋』だった。

一階は宿泊者が使う食堂なのだろう、昼過ぎ、携帯の時計で確認したら1時37分だったが疎らに人がいる。

「1人、1日10G 朝食夕食付き、各部屋にシャワーが在るが大風呂が使いたければ、別で10Z」

「10日頼む、稼げれば延長も」

そう良いながら、鞆から出したゴールド硬貨を10枚渡す。

あとゴールド硬貨10枚に、ゼニー硬貨9枚、締めて100Gと90Zか…。

武器の値段が判らないが、足りなければCPを使って買い物をするしか無いだろう。

流石にチート能力らしいと言っても素手で、迷宮探索は御免こうむる。

「丁度100Gだな。コレット、案内を頼む。昼食を済ませてないなら、部屋を確認して降りてくると良い、朝食の余りで良いなら出そう」

そう言つて、ドアの正面に在ったカウンターから厨房らしき所に引つ込む店主と交代で目の前にやってきたのは、コレットと呼ばれた黒髪の13〜14歳くらいの少女だった。

「いらっしやい！コレットと言います。お客さんのお名前は？」

「宮部、曆、職業はあれだな？駆け出しシーカーと名乗って良いのか？」

そんな会話をしながらコレットに付いていく。

三階建ての店はそれなりに広く、表からでは判らなかったが、奥行きが結構あるみたいだ。

「昨日、PTのお客さん達が違う宿に行っちゃったから、一番良いお部屋に案内できるよ！」

「それは、運がよかった」

ピョコピョコと跳ねるように、笑いながらこちらを伺い言ってくるコレットに笑い返す。

案内された部屋は、三階で店の一番奥に当たる。窓を開けると通りが見渡せる場所だ。

来る途中でドアが開いていた部屋を何気なく見ていたが、それに比べてこの部屋は広い、気がするが…。

「他の部屋と比べて広い気がするが？」

「一番奥だからね〜ちょっと不便だけど、お兄さんは、シーカーなんでしょう？だったらお部屋は広い方が良くないかな？って思ったんだけど…」

「いや、不便とは感じないから大丈夫だが、同じ値段で良いのか？」

「大丈夫だよ〜！でも出来れば長く止まって欲しいかな？」

笑いながらそう言うてくるコレットに、考えておくと言い返し食堂に一緒に戻った。

「〜」馳走様でした…」

野菜と肉たっぷりシチューが入っていた皿と香ばしいパンの入っていた皿に向かって手を合わせる。

「曆お兄ちゃんは、東方の人だったんだね」

「ん？東方？東方と言えば東方だが…」

その様子を、昼食がまだだったコレットと一緒に食べていた為に、見られて突っ込まれた。

コレットは『なんちゃら神様〜〜なんたらかんたら』と祈りを捧げていたので、文化が違うなと納得してはいたが、東方とは…？そんな私の様子が、判ったのだらう、コレットは言葉を続ける。

「え〜つと、昔泊まったお客さんたちが東方の大陸から来た人たちで、皆お祈りをしないで、曆お兄ちゃんみたいに『頂きます』『ご馳走様でした』って言ってたから、曆お兄ちゃんも東方の大陸からきたんだ〜と思ったんだけど」

違った？と首を傾げるコレットを曖昧に回避し、名も無き寒村の出身で親から教えて貰ったと嘘を付いた 東方の事を聞く  
と、『米』『醤油』『味噌』などの食材も在り、時々この店でも出  
すらしい事が聞けた。

これは、神の思し召しだろうか… 感謝も信仰もしないが。  
余りにも嬉しそうだったのか父 店主で、名はダンカンだったに  
近々朝食か夕食に出して貰うのを頼んでみると言ってくれた。

7歳も年下の子 16歳らしい 気を使われたのは恥ずかしいが、  
和食を食べるのは存外のそれに勝る喜びなので素直に感謝したら、  
顔を真っ赤にして照れていた。

そんなやり取りをして、食器を片付けるコレットを見送りながら、  
カウンターに出てきたダンカンに、この辺りでお勧めの武器屋、防  
具屋を教えて貰う。

寡黙な人だが、コレットが言うには、昔は腕の立つシーカーだった  
らしいのと、シーカーが良く泊まるらしい店なので知っているだろ  
うと思つて聞いたのだが、予想以上の収穫で、初心者用の店と中級  
者 大体ランク4以上らしい が利用する店を教えて貰えたのに満  
足だ。

「いつてらっしやい！」

「ああ、いつてきます」

昼食を共にしたからか、気軽に接してくれるコレットの見送りを受けながら、武器屋と防具屋に向かって歩いていく。

しかし、東方とは……テンプレ乙。だがパン食のみで生きていくのは辛いので正直助かった……。



## 鉄板戦闘

ピキーピキー

「さて…どうするか…」

足で軽く踏んでいる物体を見やりながら一人呟くが、私以外のシーカーが見えず、特に返事も期待していない独り言が仄明るい洞窟内を木霊する。

ピキーピキー、ピキーピキー！

活きの良い青い物体は、その愛くるしい見た目と泣き声に違わず初心者が一番最初に相手する敵。名前は、その姿かたちから違わず『スライム』である。

昨日寝る前に、ダンカンから借りた初心者の手引きなる本で学習した通りだとすると、1匹ならば大人なら素手で倒せる、その程度の敵である。

しかし、1階でも身の危険がある危険な場所という謳い文句は、その本の最初に書かれており、この愛くるしいマスコットになりそうな敵も群れば恐ろしい敵になる。

先ほどまずれ違った他のシーカーも5〜6匹のスライムに群れられ、逃げ出していた。

良く伸縮する体を利用した体当たりは、確かに、それなりの体格であったシーカーに痛打を与えるだけの威力を有していた。

今、私の足元に居る一匹もその群れに居たのだが、逃げ出したシーカーを追わずに、すれ違った私を格好の獲物だと思ったのだろうか、

体を翻し、体当たりをしようと思いを縮めた所で  
気がついた私が踏んでいると言っている。

「テンプレ乙…と言いたいところだが、これでは、自分の力が良く  
わからないな」

少し足に力を込める。

ピーーーーー

そんな断末魔を残し、スライムは魔力の塵に還り、足元には金銭に  
換金できるという小指程度のクリスタルが残される。それを拾い上  
げ、透かすように眼前に持ってくる、淡い水色を確認する。

「水のクリスタル、純度は最低ランクで10ゼニー程度」

本の情報を反芻しながら、そのクリスタルを鞆に仕舞い、私の初戦  
は終わった。

そう、此処は、リンバス内部1階層。昨日登録したばかりの人間が  
行き成り挑むのは珍しいのか、コレットに心配され、ダンカンには  
『頑張れ…』と有難い言葉を頂き、紹介された店で昨日の内に購入  
した中古のショートソード 50G也 と中古のラウンドシールド  
50G也 を、片手に軽く潜るために白亜の宮殿まで赴き、内装  
に一頻り感心して警備の僧兵に怪しまれる前に、エレベーターに似

た装置を使い、ここまで降りてきたのだ。

（結構な心構えをしたのだが、剣を振る前に、足が出てそのまま押し潰したのが初戦だったとは…）

追い立てられていたあのシーカーには、悪いが、運が良かったのか、悪かったのか…。

そんな事を考えながら、仄明るい洞窟を進む。心は静かに、それでも隠しきれない不安と、好奇心を持って余しながら…。

テンプレ乙が往くッ！

第四乙【鉄板戦闘】

スライムを倒した所から歩き、何にも出会わないままに、十字路の様な通路の少し手前で、

第六感というのだろうか？言葉に表すなら『敵意』と表すのが妥当な違和感を、左手の通路に感じ足を止めた。

神経過敏か？と思ったが、リンバスに降りる前に確認したツールのアビリティで付けていた

【危機感知】を思い出し、盾と剣を構えながら進み、襲い掛かってきた敵を、左手の甲にベルトで固定しているラウンドシールドで弾き飛ばした。

状況から考えて いや、考えるまでも無く 待ち伏せされたのだろう。

ダンカンが進めてくれた武器屋 無論初心者用の で手に入れた中古のショートソードは、買うときにサービスして貰った皮の鞘に入れ、腰に掛けているが、常に柄に手を置き、抜けるようにして、注意をしつつ、足音を、息を殺していた。

それでも、消音 スニークと言いたい の魔法を掛けられている装備でも無く、自力で魔法を掛けている訳でも無いので、衣擦れや鞆が鞘や盾に当たって音が出る。

それ故に結局、今の状態では、神経を磨り減らしても簡単に気づかれる。

「ツツツふう！……それなら最初から堂々と往けば良いか」

一つ学んだ、そう納得し、再び踊りかかってきた眼前の敵を盾で弾き、集中する。

ぐるるるるぐるるるるるる

唸り声を上げるその姿は、小さな子供位の背丈で肌は緑色。

暗がり、輪郭だけ見れば人間にも見えるだろうが、魔力を含んで燐光すると言う洞窟内の  
淡い光で照らされるその顔は、敵意と食欲歪み、並びの悪い歯は唾液に塗れ鈍い光を放っている。

「ゴブリンか」

本の情報を元に考えると、それ以外に居ない。

食欲は旺盛で、時には徒党を組む場合もあり、下の階層に進むにつれて知性を持ち、弓を使ったり、魔法スキルを使用してくる場合もある、シーカーに取ってメジャーなモンスターの一匹。初心者階層  
1階層から5階層までがそう言われる。での主な死因がコイツらしいのだ、通称初心者キラ。間違いない初心者である、私が油断  
していて良い相手ではない。

ぐるああぐるあああああ！

「これが本当の初陣だなッ！！」

観察するだけで、打って出ない私に痺れを切らしたのか、鋭利な爪を振りかざし、飛び掛ってくるゴブリンは、昨日までの私の現実か

らすれば、夢か幻なのだが、これは醒めることの無い現実なのだ。  
あの鋭利な爪で切り裂かれたら痛いだろう、死んでしまつかもしれない。

ぐぎゃッ

「だからっお前がっシネエエエエ！」

《ファストブレード》

ギヤアアアアア

飛び掛ってくるゴブリンを、盾で逸らし、体勢を整えようとした所にショートソードでの  
1撃を放つ。

想像した軌跡通りを描き、私のスキル発動の意図を汲み剣技スキル《ファストブレード》  
が発動し白い燐光をショートソードに纏わした、ゴブリンの頭を狙ったソレは、綺麗に狙い通り何も装備していないゴブリンの頭から股下までを割った。

叫び声を上げ、魔力に還るゴブリンを見ながら、初めての実践と言える戦いを終わらせた事に安堵感を覚える。

（剣技スキルも使用出来たし十全だな）

気合を入れるためとは言え、無駄に力んでしまったのは要注意だが、武器屋で親方 こう呼べと言われた に教えて貰った通りに、戦闘中にスキルも発動できた。

魔法スキルに比べると、剣技スキル等の接近戦スキルはタイミングが難しいらしい。

それ故に、一度とは言え、初陣で発動できたのは喜んで良いだろう…。

そんな事を考えながらも、ゴブリンが落とした炎クリスタル スライムより心なしか少し大きく少し濃い赤い色 を拾い、先を進むとしよう。

待ち伏せを受けた十字路を右手に曲がり、進む。

本来なら既に攻略された階なので、マップが存在するらしいが、それを購入するのにもお金が掛かる。

中古とは言え、剣と盾を買い、尚且つ昨日の夜、シャワーを浴びて寝ようと思った所で気がついたのだが、タオルも石鹸も備え付けではない事に気がつき慌てて、最低限の日常品を購入したため手持ちの残金が0以上、マップ無しで進むしかない。

1階層から4階層までの出現モンスターは変わらないと本に書いてあったので、下に降りるポーターを見つけたら迷わず乗る気ではあるが、階層を進めるより、先ずは、金だ。

そう思考を切り替え、初心者本で集めた情報を思い出しながら、金策を纏める。

リンバス内部で稼ぐのには幾つかの方法がある。

1つ、モンスターを構成する魔力の余剰分が結晶化したクリスタル、これを売ること。

2つ、モンスターを構成する際に、受肉した部分が存在する場合がある、これを売る事。

3つ、モンスターが倒したシーカーの装備や、何処かで見つけてきたアイテムを持っている場合があるので、これを売る事。

4つ、迷宮内で幾つか『採取エリア』と呼ばれる各種素材の群生地などが存在し、そこに採取しに行く事。

5つ、一定魔力を手に入れ、完璧に受肉した、ハイクラスモンスターHMを倒す事。

この5つが主に挙げられるが、数字が大きくなるほど、危険が増すらしいし、運も絡んでくる。

クリスタルは、絶対に出るといふ訳でも無い、受肉した素材というのも確立的にはクリスタルと同じくらいらしい。装備持ち、アイテム持ちのモンスターは手強い上に、存在が稀だ。採取自体は危険ではないが、場所がもつと下層の魔物の群生地だったりする以前に、素材エリアの情報自体が高額になっている。

HMは、そもそも考慮外、Lvもスキルも足りなさ過ぎる、CPアイテムでチートすれば勝てるか？と思っただが名前や説明文を見る限りで強そうなのは高額だ。

結局幾らチートだと言っても、コツコツ地味にモンスターを倒してクリスタルと受肉素材を採取して、誰が置くのか知らないが突然現れる宝箱を求めて彷徨うのが一番なのだろうと結論付ける。

拾得金額2倍に賭けるのが吉だろう。

ツールでは、アビリティだけでなく、スキルもだったが名称をクリクすると説明文が出るようになっていたが、それに困るとお金に

為るものが出る確率が2倍と書いてあったので、十分充てに出来る筈だ。

今日中に、ある程度稼いで着替え等を手に入れなければ…。

そんな事を考えていると第六感に再び違和感が起こり、通路の前方に動くものを発見する。

数は2体、どうやらゴブリンが二体 まだこちらに気がついてない。頭を金策から切り替え、足の筋肉に力を入れ…駆け出すっ。

ぐぎゃ？ぐっぐ？

足音に気がついたのだろう、二体がこちらを向いた。その瞬間に前の世界とは比べ物にならない程に強化されている私の脚力を持って、30メートル程度の距離は半分に縮められている。

ぐらあああ！ぐらあああ！

慌てて構えを取り、こちらを威嚇してくるが、遅いつ！

ぐぎゃあああ！？

《ファストブレード》

その間にも距離を縮めていた私は鞘から剣を抜き放ち、そのまま剣を抜く為に捻った身体の勢いを利用し左のゴブリンの首を、切り落とす。

一撃で断末魔を挙げる相方に怯えたのか、硬直した残りのゴブリン

を横目で確認し、振りぬいた剣に遠心力を換算しそのままに一回転、再び首を飛ばす。

ぐぎゃっ

《ファストブレード》

二体のゴブリンを処理し、周囲を確認しながら剣を鞘に戻す。

剣技スキル《ファストブレード》の白い燐光の残滓が二つ半円を描いているのを確認しながら、剣など振るったことが無い私が、思い描く最高の動きが出来るようになってきている要因である、アビリティ：剣技補正の凄さを思い知る。

刀剣の類を使うに置いて、最高峰の補正を受けるとは、正にチートの本懐だろう。

剣を振る以外にも足裁き、隙を伺う、相手の動きを考える。これらにも補正が掛けられているようで、一端の剣術家気取りが出来るのだから…。

~~~~~

「うぉー!?!」

陰気な場所で、LVアップ音と言えばこれ!と言った音楽が鳴り響

く。

慌ててポケットに手をやり、携帯を取り出し確認すると、ツールが起動していた。

「LVが上がりました。

LV 2

HP 310

SP 170

力 25

魔 25

防 25

速 25

運 21

EXP 6

装備：中古のショートソード 攻撃力 10

：中古のラウンドシールド 防御力 5
」

「…結構いい加減な上昇率…なのか？」

取りあえずSPが回復しているようだし、消費SPも重くないのでスキルは積極的に使っていこう。方針を固めながら、アビリティとスキルの項目を見る。

「

アビリティ

総AP 105

余りAP 5

アビリティ名	占有AP
経験値2倍	20
剣技補正	20
危機感知	10
拾得金額2倍	20
スキル修練速度2倍	30

スキル

剣技スキル	ファストブレード	習熟度2	消費SP5
魔法スキル	ディア	習熟度1	消費SP3

アビリティポイントが5増えているが、青地になったアビリティは無く、新規修得のスキルも無いが習熟度は進歩している。

時間を確認すると、リンバスの攻略を開始し始めて、約30分程度経っていた。

(三十分でLV1か、遅いのやら早いのやら…。)

経験値2倍のアビリティの事もあるので、各モンスターからの取得経験値がハッキリしないが、どちらにせよ戦わないと経験値が入らないので先に進むことにする。

ぐぎゃあああああ！！ぐぎゃっぐぎゃ！ぐるううう！！ピキーー
ー！

「これは…一寸不味いか…？」

LVが上がった戦闘から4度、戦闘をこなし再びLVが上がり、次の戦いでまた上がるなど言う所で、下層に降りるポーターを発見したのだが…。

ゴブリンが3匹、スライムが1匹、ポーターの前で群れているのだ。これまで同時に戦った最大敵数は、ゴブリン2体。その倍の数と相手取る事になる…

仰るか反るか 携帯を取り出し、ツールを開き、LVが3になった段階で覚えた魔法スキル アギ 火炎系攻撃スキル 消費SP4 と残量SP140を確認して、気合を入れなおす。

(一時ソロプレイ前提なのだから、最低でもあの個体数は倒せるようにならなければ…)

剣を抜き、盾を構え、身を潜めていた曲がり角から、ポーターがいる部屋へと繋がる道に躍り出る。距離はそう遠くない、部屋まで5メートル弱。敵がこちらに気がつくが、ロングレンジの攻撃手段は持っていないはず！

「《アギ》ッ！」

轟ツと、空気を燃やしなから頭一つ分くらいの大きさをした炎の塊が、私のスキル発動の意図を汲み現れ、想像した軌跡を描きながら、真っ直ぐと敵陣に突っ込む。

ピーーーーキーーーー!?

ゴブリンに当てる筈だったのだが、こちらに向かってこようと跳ねたスライムに丁度当たってしまい、断末魔を挙げて燃え尽きる。

ぐるう!?ぐぎゃっ!!

突然の炎に驚いたのだろう、一瞬の硬直状態を生み出し、その隙にアギで狙っていたゴブリンを追撃する。

《ファストブレード》

首を跳ね落とし、白い燐光の軌跡をそのままに一步、バックステップの要領で下がる。

数瞬前まで私が存在していた所に、ゴブリン二体が飛び掛ってくるが、寸前の所で回避が間に合い、更に二歩下がり、肺に溜めている息を吐く要領で、SPを消費。

「《アギ》ッッ」

消費したSPを呼び水に再び、火炎の塊を顕現させ意思を持って打ち出す。

ぐぎゃアアアっ!?

使った感触からそこそこの威力を持っているのが分かるが、手前のゴブリンの左手を消し炭にするだけに留まった。

狙われたゴブリンにもまともに食らえば即死だと、理解できたのだろうか？

左手で火炎の塊を振り払い、防御したのだ。

「だがッ貰ったっ!」

《ファストブレード》

ギヤアアアア

左手を代償に命を守ったが、矢張りそれは、数瞬命を永らえる事しか出来ず、痛みに膝を突いた所を狙い、首を跳ねる。

ぐらああああ!!!!!

「ツツツツ」

一瞬だけ意識が、倒したばかりの敵に集中していた隙を衝かれ、残りのゴブリンが飛び掛ってくるのに対処が遅れ、左わき腹を浅く抉られる。

思わず剣を手放し、傷を抑えなくなる。

飛び散る赤い血液に、寒気がする。

意識が一瞬真っ白になる。

ぐらるうああああ！

「ツツ！舐めるなアアア！！」

その一瞬が絶好のタイミングだと悟ったのだろう、唸り声を挙げ、愉悅に瞳を歪ませ、飛び掛ってくるゴブリンの顔に冷めた意識が、一気に高まり、今度は逆に意識が沸騰しかかるのを何とか冷却しつつも、雄たけびは止められず、飛び掛ってくるゴブリンの顔面をラウンドシールドで横殴りにする。

ぎゃんっ！

全力で殴り飛ばしたので、左手が軋み痛みを挙げるが、今は無視。盾を振りぬいたそのままの流れで、宙に浮いたゴブリンを切り裂く。

《ファストブレード》

断末魔を挙げ消え去るゴブリンを、見送る余裕も無く、荒い息を整えようと深呼吸する私とLVアップを知らせる軽快な音楽だけが、その場所に取り残される。

「《ディア》」

そう呟き、思考の中で指定した効果対象である、自分に白い燐光が纏わりつき傷を癒す。

昨日の内に、試していた回復魔法　メディア　だ。宿では、ショートソードで少し傷を作ったのを癒してみる位しか出来なかったが、浅く抉られた脇腹の傷も綺麗さっぱりと治った。

雑貨屋で貰った傷薬も一応持ってきてはいるが、SPに余裕が可也あるのである程度までの回復は魔法スキルに頼ることにしていた。スキル習熟度も挙げたいし、経済的だ。

「服も買わねばならないしな…」

視線の先には、ジャケットは何か免れたようだが、Tシャツはゴブリンの爪痕がくつきりと残って、肌着が覗いていた。

一瞬だが、死を実感したが、それを振り切り戦った代償がこの程度なら僥倖だろう。

心の隅に存在していた慢心も、打ち砕かれた、それでもリンバスに潜って日々の糧を得ようと自然に考えられているのは、この状況に酔っているのかもしれない。

だが、それでも良い…生きているのだから、嫌になるまで好きにしよう。

「さて、先に進むか」

リンバスに潜り続ける事を改めて自分に確認し、エレベーターの様相を呈している、ポーターに向かいながら携帯とタグを取り出す。

下層に降りるボタンと、出口に戻るボタンが在るが、当然降りるボ

タンを押し、タグを差し込む。そうするとポーター内部に光が溢れ、浮遊感を感じそれに身体を委ねる。

4月10日 土曜日 午前10時26分 まだ帰るには早いだろう。

主人公最新ステータス

LV	4
HP	340
SP	200
力	32
魔	36

防 29
速 33
運 21
EXP 47

装備：中古のショートソード 攻撃力 10
：中古のラウンドシールド 防御力 5

アビリティ

総AP	115	余りAP	15
アビリティ名		占有AP	
経験値2倍		20	
剣技補正		20	
危機感知		10	
拾得金額2倍		20	
スキル修練速度2倍		30	

所持スキル

剣技スキル	ファストブレード	習熟度	7	消費SP	5
魔法スキル	ディア	習熟度	4	消費SP	3
魔法スキル	アギ	習熟度	2	消費SP	4
魔法スキル	スクンダ	習熟度	0	消費SP	12

鉄板買物

私が今日探索した、ローランド連合国に存在する、大迷宮「リンバス」。

この迷宮と呼ばれる施設は、クロス大陸と称される地続きの大陸に、一つしか存在しない。

大規模な魔力、それこそ地獄から湧き出ていると言われる事もある程の、が、モンスターという形で現れ、長く存在するモンスター程、力を得、存在を濃くする。

そう書いてある文章を読みながら、一人呟く。

「詰るところ、潜れば潜る程敵は、強くなる訳だ」

テンプレ乙が往くッ！

第五乙 鉄板買物

薄い冊子の様な、それで居て本！と呼べるような確りとした作りの書籍を捲りながら納得する。
書籍の名前は、【これで君も探索者！】、入門書の発展みたいな物だが、お値段は100G也。

これによると、各階層の敵の分布図というのも大体決まっているらしく、その情報も買えるらしいが、高い。宿代、慌てて揃えた生活雑貨、食事代、これらに比べて探索者が必要とする装備、情報等、これらに結構な物価の差がある。

宿代が1日二食シャワー付き10Gに対して、中古の剣と盾が50G、もつと判り易く表現すると

一階層から十階層までのモンスター分布図の書いてある書籍が1000G…。

それだけ探索者業は稼げるのだろうか、結構ぼったくりだと思ったり、生死を賭けるなら情報を得て安全に行きたいと言う思いで板ばさみだ。

あの後、結局4階層まで潜り、2つLVを上げまだ体力的にも精神的にも余裕は、あったが如何せん生活用品で全額を使い切っていた私は、昼食を持ってきていなかった。

水分は、井戸水をコレットが好意で水筒に入れてくれ持たせてくれ、ダンカンも後払いで良いから昼食を持って行けと言ってくれたのだが、金を出そうと思えばCPを使って出せなくは無いのが何とも心苦しく今日は、本格攻略をせず様子見と言うこともあり辞退したのだ。

今日わかった事だが、リンバスを潜る行程で起きる、戦闘も探索も体力と精神力を使う。

空腹で頭が回らなければ足元を掬われるかもしれない。

まだ遭った事は無いが、モンスターハウスという敵の巣窟に遭うかもしれない。

そう考えると、時間も昼過ぎで、尚且つまだ今日が始めて、と言う事でもう少し行けそうだったが、5階層に降りるポーターで地上に帰還し、神殿内部に在った連合国の出先機関である探索者専用の買取所に、今日の戦果を全部叩き売った。

今日の戦果は、水のクリスタル10Z×4 炎のクリスタル30G×11 風のクリスタル40G×7 バットと呼ばれるコウモリが落とした バットの翼10Z×3 の計610Gと70Z也。

そして、水のクリスタルが特に安い事など色々気に掛かる事が在ったので、その足で書店に来ていた。

もう驚かないし突っ込みもないが、この世界は本屋という物がある。私が見ている探索者用の指南書や魔法スキルなどに言及した専門書だけでなく、しかも…ファクション雑誌らしき物も普通に置いてあるのだから、初めてみた時は言葉が出なかった…。

余所は余所、この世界はこの世界、と割り切るしか無いのだろう。と無意味に諦め、諦観の念を抱いた。

そして、初心者指南書を立ち読みしていたのだが、この技術力というのだろうか？

文明発展の根幹を理解した文言が在った。

どうやら、クリスタルというのは前の世界で言う鉱石の一つに近い

らしく、山などで発掘され、それを一定の魔力を掛けたりする事で、クリスタルから水を抽出したり、火を起こしたりする事が出来るそうだ。

そして、凄い事に、このクリスタルで起こす現象は汎用性が高く、例えば幾つかの加工した材料を持ち寄り、完成形態を想像しながら土のクリスタルを使うと、強固に各素材を接着したりする事が出来るらしい。

これをクリスタル製造法と名づけ、それを更に発展させ、クリスタルが起こす現象を術式で固定し魔法アイテムとする【新型魔法具生成法】が発展したお陰で、電気やガスと言った、科学的な発展を遂げずに、ここまでの文明開化を遂げたようだ。

そしてローランド連合国は、リンバスという無限に貯蔵されている鉱山を持っているに等しい…。

これが教会と諸国の停戦、そして連合が成立した背景なのではないか？と考えてみる。

教会は、独占した方が旨味はあるが、小国の集まりとは言え周辺国家を敵に回し、膠着状態を続けたとしても何れ大国が押し寄せてくる。それならば宗教という立場を確保し、ある程度の影響力を確保する為に、停戦をしたのではないだろうか？

紆余曲折を経て単一国家が統べるのではない、【連合国】と成ったのも各国家の重鎮同士で牽制しあえばある程度フラットな政局が続くことを見越して…。

ローランド連合国の首脳陣は議会制民主主義に近く、連合国に纏まる前の各国家の重鎮が、【貴族】と名を成し、三人の国主を選定し日々この国を良くする為に頑張っている とは、入国の際に貰った

冊子の文言である。

しかし、現在手に取っている書籍の内容と、先ほどの閲覧した初心者指南書に有った内容も付け加え考えると、こうなる。

大きな三日月型を取る、このクロス大陸のほぼ中央に位置していた連合国に成る前の諸国家とメディナ教は、上と下に存在する大国からの侵略の危機があり、それなりに大きな土地を各国が持っているが、それを取り合っている現状では、上下を完璧に支配している大国に勝てる見込みが無い。メディナ教自体も、元々がそこまで信仰されていた宗教ではい上に、大国のどちらも精霊信仰が基本であるため取り潰されるのが目に見えている。

そんな中で、メディナ神殿に迷宮という無限に続く鉱山が出現しメディナ教が、資金源を手に入れ僧兵を強化し、宗教として浸透しつつあり、それに慌てた各国が【リンバス】の占有を目標に【主権を脅かされている】とオブラートに包み攻め込む。

神殿という要塞はあり、迷宮で鍛えた僧兵という兵力があれども、大半は普通の信者のメディナ教側、片や小国ながら連合を組む、上下の大国から自国を守ってきた軍隊の集まり。

メディナ教側は負ける可能性が大きく、連合国側は大国の動向もあり早く終わらせたい。

そこでメディナ教側は一計を案じた、【メディナ教側が白旗を上げる】事だ…。

既に、宗教としては各国が恐れる程は浸透し、そして相手は一国だけでなく連合となった組織、この本にも書いてある通り【何処が神殿を管理するか】で揉め、血で血を洗う内戦に発展し、事態は一転二転し、結局神殿は、メディナ教側が管理し、連合国側はメディナ教を国の主教として定めることになる。

そしてメディアの最高司祭は、枢機卿長として名前を変え、後に出来るローランド連合国の重鎮の1人としての座席に座ることになる。

メディア教の取り成しで連合国として纏まる事になり、絶対君主制を布いていた各国は、転機を余儀なくされ、貴族中心の議会制として形を変えた。

何処かの国がリンバスを独占するより、連合国として纏まる利点は、幾つかあったのだろう。

例えば、メディア教とのリンバスの占有権の独占など…。

こうして、ローランド連合国は、前の世界の政治体系に近い議会制を導入し尚且つ、リンバスという金が無限に沸く泉を手に入れ、大國の軍事力という脅威に、経済封鎖というカードを手に入れたのだ。

連合国がリンバスから出るクリスタルや素材を優先的に買い取る事で、流通を制御し尚且つ自国で消費する分を安く上げ、力を蓄え、市民の求心を図る…。

貴族と称される人たちや、議会の人たち、それとメディア教の上の人間関係は廃棄物汚染のヘドロより濁ってそうで、注意しておこう。

尤も、貴族に連なる連中は、連合国の街を城壁で囲んだ丸として考えると、神殿を中心に左半分が探索者地区と呼ばれ、私が今居る地域だ。右半分が特権地区と呼ばれ、貴族に連なる者たち等が住んでいる地域と明確に別けられている、らしいのでお近づきになる機会も無いだろうが…。

そこまで考え、探索者の入門書を読んでいたのが、何時の間にか歴史の本に取って代わり、尚且つ考えに耽って余程時間が経っているのだろう、店員にチラチラと見られているのに今更ながら気がつく。他に立ち読みをしている人間を見かけた時から、立ち読みで済ませる気で居た私は、愛想笑いをしてそそくさと逃げ出すしかなかった。…あつ、と引き止めるような声は聞かなかったことにする。

書店で思ったより時間が過ぎていたのに驚きながら、雑貨などを買いたい足す為に、店が立ち並ぶ場所にやってきた。

露天や出店がひしめき合う広場を道の端から眺めながら、良い匂いに釣られて買ってしまつたローランド風タコスを頼張る。野菜と肉と、仄かに香る柑橘系の生地の匂いが合わさり、見た目は濃いそうな味を覚えるがそれ程でも無く、サッパリした味に満足する。

先程の歴史書の内容を思い返ししながら、ローランド連合国が、この地を【国】と定め同時に【首都】と定め物流の中心にしている恩恵が、この賑わいなのだろう。

「あ、あの？お兄さん？」

「……ん？」

何時の間にか、横に出現していた人に声を掛けられ、振り向いてみるとそこには、惨劇の女王、移動喫茶のメイ店主が居た。無論、移動喫茶と呼称しているリアカーも健在だ。

「あ〜〜〜メイ、さんで良かったか？丁度良かった、喉が渴いていたんだ、お勧めの冷えたジューズ一本」

「あ…名前…ッ！わ、判ったよー！今日はね、サルタ産の林檎で良いのが入ったからリンゴジューズが凄くお勧めだよ？」

はい、っと笑顔で渡してくるビンを受け取り、御代を聞くとオレンジジューズと同じ10Zとの事だったので硬貨を渡し、コルクを抜き煽る。

「これも、美味しいな。先日のオレンジジューズも美味かったが、それに劣らぬ美味さだ」

「あ、あははははは、そう、かな？」

褒められ慣れてないのか、顔を真っ赤にして明後日を向いているメイを眺めながら、タコスを頬張り、リンゴジューズを煽る。

林檎特有の甘みだけでなく、丁度良い酸味が有り、林檎をそのまま漬しているのだろう、果肉の食感も好みで、個人的趣向としてはオレンジジューズも捨て難いが、こちらの方が好きだ。

「お兄さんそんなに喉渴いてたの？」

「朝からリンバスに潜ってな、最低限の水分摂取しかしてないのも

有ったが、少し緊張してたんだろうな、自分でもここまでガッツクとは……」

一気に飲み干してしまった私を呆れた目で見ていたメイにそう告げながら、空き瓶を返し、もう一本頼む。

「お兄さん、シーカーなんだ…見えないなあ〜」

「武器屋の親父にも言われた、『そんな細い腕で剣が振るえんのか？！』とな、御代だ」

現在は法案を守る為、武器防具は一度宿屋に置いてきている為丸腰だから尚更だろう。

硬貨を渡しながら、そう思う。

「今日が初陣だったからな、私もどうなるものかと思っていたが、なんとか成ったよ」

「そっか、大丈夫だった？怪我とか無かった？」

「油断して、一発良いのを貰ったがそれ位だな、浅い階層と言つのもあるが……」

まあこれからも何とか成るだろう　そう続けようとした私の言葉は、メイの予想外の行動に消し去られる。

「ちょ！？怪我？！怪我したの！？何処よ！大丈夫なの！？見せなさい…」

「お、うお？え？まで落ち着け」

何をどう思ったのか突然、私に詰め寄り、体中を慌しく確認しようとするメイの魔の手から慌てて距離を取る。

「ちょっと！なんで逃げるのよ!？」

「はあ…怪我は魔法で癒す事が出来るくらいの深さだったから問題ない、もう塞がってる」

ほらな？とジャケットの前を閉じて隠していた、Tシャツの爪あとを見せると、どうにかメイは落ち着いてくれたらしく、大丈夫なの？と再確認するだけに留まった。

「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「あう…大丈夫なら、良いよ。でも気をつけてね？」

「私も、死にたくは無いからな、気をつけるさ」

取り乱しのが恥ずかしかったのだろう、上目遣いでこちらを伺ってくるメイに笑いかけ、約束する。それから暫く話し、仕立ての良く、それでいてリーズナブルな服屋を教えて貰い別れた。

「私！火曜日以外はここか、門の所でお店開いてるからきてね!」

「ああ、また来るよ」

「ぜー…たいだから!」

そんな風なやり取りをしながら、メイのお勧めの服屋へと歩いていく。

鉄板買物（後書き）

さて、今回は短くなりました。ここが分岐点となるというか…なので取り合えずこの時点でUPしました。

分岐点というのは、このままオリジナルで行くか、二次創作として登場人物を出すか…。

良ければご意見ください。

二次創作とするなら既に作品は【リリカル】なアレに決まっていますが、悩んでいる所です…。

鉄板遭遇

道行く人や、これまで会った人達の服装からも判っていた事だが、この世界の服飾関係は、前の世界の水準を在る意味超えているような気がする。

前の世界でそれ程、服装に気を使っているという訳でもなかったが、最低限の身嗜みは整えていたので、ジャージで闊歩するという事はなかった。

それ故に、服はそれなりにお金が掛かると思っていた部分が在った、事実、前の世界でもYシャツ一枚に千円単位で掛かる事も在り、これも人付き合いの一貫かと思いつながら友人の買物に付き合つて、涙ながらに数千円を見送りながら購入する事も多々あった。

しかし、この世界では、少し違った…。

それなりに良いものは高いのは当たり前だが、基本的に男でシンプルな服装を好む私が買い揃えた服はどれも、それなりの素材でそして安かったのだ。

シルクのような手触りの滑らかなYシャツが三枚で10Zだとか…

確りした作りの下着が十枚で10Zだとか…

前の世界で買えば万単位で飛ぶであろうジャケットが10Zだとか…

余りの価格破壊に、二度三度と値段を店員に確認したのは、仕方のない事だろう。

結局私は、十数着の服を上から下まで新調し、下着も購入したのだが、それでも100Gと70Zと、今日稼いだ半分以上は飛ぶ覚悟をしていた分、拍子抜けした。

そして、結構な量になったので、宿に届けてくれるという店員に感謝しながら、店を後にしたのがつい先程なのだ…。

テンプレ乙が往くッ！

第六乙 鉄板遭遇

そもそもの発端は、この世界では普通でも私の価値観的に考えれば、良い買い物が出来たというのが私の心の度を大きく広げていたのだらう。

だからだらう、こんな

「テンプレ乙」

「あああん！？行き成りシャシャリ出て来てテメー！何訳のわかんねーこといつてんだ！こらあああ！？」

今時、少年誌でも見掛けない気がする展開になっているのは…。

目の前には、青年と中年の狭間ぐらいの酒臭い男達3人、その男達と対峙している私の後ろには、三人の少女達。

そうなんだ…何処かの喫茶店・移動喫茶では在らず…で軽食でも食べて、探索装備でも新調するかと考えていた所に、目の前の男達が、後ろの少女達の1人に平手打ちを食らわせようとした所に割り込むという、テンプレ乙な展開を繰り広げてしまったのだ…。

「死にたい…」

「あああああん！？じゃあ俺さまが殺してやるよ！！！！！」

ひゃっはー！とでも言いたいのか、言語中枢に退行が見られる男

A（仮名）がポケットからナイフを取り出してこちらを威嚇してくる。

しかし私は、そんな事を気にしている場合ではなく、自分がこれまで『テンプレ乙』と軽く見ていた場面を、他ならぬ自分自身で再現してしまった事に大きく凹んでしまっていたのだから…今の私の心境を表すなら『鬱だ死のう…』これ以外にない…。

「テメー！無視してんじゃねーよ!？」

確かに、酔っ払いに絡まれている少女達を目撃したからには、放っておく事は流石にしない

それは神？から頂いたチート能力云々の前に、人間として当たり前
の行動だ。

だからと言って、振り上げた男の手を掴んで 『何が在ったのかわらないが子供、それも女の子相手に手を挙げるのは、見過ごせない』
は無いだろっ、私…。

常識的に考えて、遠くから声を掛けて周囲の注意を集めながら、近づいき警備の人間が来るのを待つのがベストだ。無駄に恨みを買う、今の行動は悪手…客観的に見たらさぞ寒い行動だろっ…。

「テメエ!!!!おちよくるのもたいがいにしやがれ!!!」

ヒートアップする酔っ払い、怒りに因ってだろうか？それとも血流が良くなってアルコールの廻りが速くなったのだろうか？顔は真っ

赤になり、呂律も怪しく、手に持ったナイフで今にも切りかかって来そうだ。

私からすれば、チート能力の恩恵も有り、そもそも今日体感したゴブリン達との死闘の方が余程生きた心地がしなかった故に、自分を鑑みて落ち込むことも出来た。

しかし、助けに入った少女達。まだ幼いと言っても良い彼女達からしたら悪鬼羅刹の如くだったのだろう。小さく息を呑む音がする。取り合えず、助けに入ったのは事実なのだ。ならば最後まで助けきらなければ…。

「あー済まなかった？いやこちらが謝る道理が在るかは、知らないが…」

そもそもどうしてこうなってるんだ？と少女達の方を向きたずねる。茶髪のツインテールの子が、少し紫掛かっているロングヘアーの子を庇って、更にそれを金髪の子が庇っているという構図なので、自ずと、金髪の子が吼える。

「アイツらが、こっちは避けたのにぶつかって来たのよ！？跳ね飛ばされて、すずかが怪我したのに無視して行こうとしたのよ！」

打たれそうになっていたのも彼女だが、どうやら勝気な子のようだ。まさか酔っ払いに喧嘩を売るとは…。まあ男共に過失があるのは十分に判ったのだが、無謀と言うか、何と言うか…。

~~~~~

そんな風にある意味関心していると、突然ポケットの中に仕舞っていた携帯電話が鳴る音がする。

「ガキがぎゃーぎゃーやかましいんじゃあああ！！！」

こんな時に何だ？と思いつながらポケットに手を遣ったのが不味かったのだろうか？

それとも金髪の子が、言い分が余程気に食わなかったのだろうか？

そんな事を喚きながらナイフを持った男が突っ込んでくるのを切っ掛けに、他の男2人も突っ込んでくる。

悲鳴を挙げる少女達と周囲の人々。

しかし、結構な騒ぎになっているのに、未だ警兵は来ないのか？と嘆息しながら

「ガフツ」

振り返り、丁度突き出してきたナイフを持っている腕を流し、そのまま腕と襟首を持ち上げ、（一本背負いはこんな感じだったか？）と思いつながら投げる。

地面に叩きつける寸前で、畳は畳でも、石畳だと思いつき出し、頭が落

ちないように気をつけたが、男は白目を剥いて、沫を吹き伸びた…。凍る空気…殴りかかって来ようとしていた残りの二人も、その場で足を止めていた。

「……凄い……」

目を丸くして驚いている風な、紫色の髪の子が呟くのが聞こえるが、そもそも高校時代の選択教科の1科目として受講していただけ、それも二年生の時の1年間だけ - の私が、教師と柔道部員の模範試合で見ただけの技を適当に再現しただけなのだ、何処が凄いのか、周囲のこの空気は何なのか、少し私の理解が追いつかない。

「なのは!?!」「すずか!?!」「お嬢様!?!」

「お兄ちゃん!」「お姉ちゃん?」「鮫島!」

どうやら保護者なのだろう、取り巻きに見ていた人の輪から、上から下まで黒服の青年とロングヘアの女性、そして執事服の老人が出てきて三者三様に感動の再会シーンを繰り広げていた。

そんな凍った空気を打ち砕く、感動の再会シーンを余所に立ち竦んでいた酔っ払い二人は、伸びた1人を回収して逃げ出していたのだが、まあここは戦場でも無いのだから追撃する必要も無いだろう…。見逃すことにした。

仕方なかったとは云えども、暴力を奮って仲裁したのだから、私も咎められる可能性が在るか?そこまで考えて私も逃げ出す事にした…

「君、少しいいかな?」

どうやら遅かったようだ…。  
白銀に光る甲冑に身を包んだ警備兵らしき人達に声を掛けられてしまった。

「あゝ…お手柔らかに…」

本格的な荒事は今日が始めてな以上、この警備兵達から逃げ出せるか判断が付かない上に、  
そもそも国家権力に楯突くのは、これからの生活上とても好ましくない  
ないので、大人しく連行される事にした。

幾人かの警備兵が、周囲で見えていた人達や絡まれていた少女たちにも話しを聞いている様子を見て、大事には成らないだろうと希望を抱いて、警備兵に促されながら道に行く。

「ふむ…あそこに居た野次馬と被害者の子達からの証言とも一致するし、問題は無いね」

「覚悟はしていたが、あの場での事情聴取でも良かったのでは無い

かと思うのだが？」

「普通なら…それで良いんだけどね。君、シーカーだったでしょ？我々警備の人間も日々訓練は欠かしてないけれども、やっぱりリンバス内部で活躍するシーカーが不意に暴れたら、外だと直ぐ逃げられるからねー」

「嗚呼、成るほど確かに…そうか？」

「まあ君はまだL V 1桁だからね、実感は薄いかもしれないけれど、二桁なら軍に入れば高給取りだし、三桁になると天災クラスだよ？」

「そんなものか…」

一般人との能力差は隔絶するものが在るらしい。周囲の目に晒されながら、近場の派出所で調書を取られ面倒だな、と思っていたが調書を取られる間に挟まれる、目の前に居る警備長である、クロイツとの雑談は矯めになる。

「ん〜っと、証言では、君がポケットの中に手を入れたから〜ってのも在るみたいだけど、これは？武器は持ってないのに入る前に確認したけれども…」

「ん？嗚呼、その通りかもしれないな？ポケットの中に入ってたのは、コレだ」

携帯を取り出し机の上に置く。

簡単な荷物検査はされたが、没収される物も無く終わったので、ポケットから出しても不思議は無いので、正直に出してみる。

「…？鉱石？板…？」

携帯を手に取り、しげしげと灯りに掲げて見る、クロイツを観察しながら思う。

私以外にも視認は出来て、触れるが一つの物体には見えないし、ディスプレイを開ける事も出来ずにいるようだ。

「ありがとう、で、それは？」

「唯の鉱石の板。お守り代わりに、私が存在したという証…になるか？」

携帯を差し出してくるクロイツから受け取り、そう返答をしながら考える。

少し情調的だが、前の世界を生きていた証、という証左に違いは無いだろう。

記憶だけなら、思い違いかもしれない。

感情だけなら、夢かもしれない。

だが、確かにこの手にある、この携帯は、私の記憶を、感情を肯定してくれる。

唯何ものなしに放り出されたら、自分の正気を疑っていたかもしれない。

だが、確かにこの手にある、この携帯は、私を確立させてくれる。

それは、与えられたツールと同じくらい心強い物だ…。

「そうか…こちらでも仕事とは言え、すまないね。手間を取らせたね、ありがとう」

私の携帯への思いをどう受け取ったのか知らないが、クロイツは一瞬暗い顔をしたが立ち上り、取調室のドアを開け頭を軽く下げた。

「構わんよ。珈琲もそれなりに美味かったし、何より人を助けるといふのは、そこから起こりうる全てを容認するという事だ。少なくとも私に取ってはね」

これも、偽らざる私の本音だ。

此処に来ることになった原因である、事故も、人を助けたことに因って起きたものだが、誰も恨んだりはしていない。私が助けたくて助けた、ただそれだけの事なのだから…。

ただ、願わくばトラックから私が助けた少女が、私の死で挫けないで欲しい。

特に夢も希望も無くただ、死んでいないから生きているだけの私が、誰かを助けて生を全うできたのだから…。

部屋から出た私に降り注ぐ、太陽の光に目を細めながら、最期のあの時、血を吐きながら横たわる私に、泣きながら謝っていた、彼女を想う。

「あ、あの！」

「ん？」

小さめのビジネスホテル並みの派出所から出て、そういえば、携帯が鳴っていたなと思い出し、確認しようとポケットに手をやった所で、後ろから声を掛けられた。

「ああ、君たちが、大丈夫だったかね？」

「はい！あの…ありがとうございます！」

後ろを振り返ってみると、助けた少女達と、保護者らしき人達が勢ぞろいしていた。

「そうか、大丈夫だったなら構わない」

テンションをあげ過ぎてあんな醜態を晒して、実は手遅れの傷が出来てました等と言われたら、それこそ首を吊るしかない…。

そう言えば、『違うルールの中で』云々を言っていたが私の終わりがきいた魂とやらはこの世界で死んだ場合どうなるのだろうか？

再びあの白い空間に追いやられるのだろうか？

それとも完璧な消失？

若しくは、この世界の輪廻転生というシステムは、前の世界とは違うのだろうか？

「あの、大丈夫ですか？」

「ん？ああ、すまない。考え事をしていたな…失礼だったな」

どうやら考え事をして黙り込んでしまっていたようだ、紫髪の子が心配してくれる。

心配そうな顔だったので、頭を撫でて「すまん」と謝ると、照れているのか顔を真っ赤にして俯いていた。その姿が愛らしくて猫でも撫でるように、撫で続ける。

「あら？すずかがお気に入りなのかしら？」

「ふむ、すずかと言う名前なのか。いい名前だ、で、そちらの子達は？」

「あの！私、高町なのはって言います！」

「アリサ・バニングスよ！」

すずかと呼ばれた子を撫で続けながら、他の子の自己紹介も受ける。茶髪でツインテールの子が高町 なのは、酔っ払いに噛み付いていた金髪の子がアリサ・バニングスという名前らしい。

何やら、すずかを羨ましそうに見ていたので、二人も撫でてやる事にした。

あう、やらにゃーやらと鳴き声？を挙げているがまあ嫌がられていないようなのでこのまま会話を進める事にする。

「で、そちらのお三方は？この子達の保護者なのだろうか？」

「ええ、私は、そっちの貴方に撫でられているのを羨ましそうに見てる、月村すずかの姉で月村 忍よ、でこっちが…」

忍と自己紹介した美女が横に立ちながら、なのはを複雑そうな顔で見ている黒服短髪黒髪の青年を指差す。お姉ちゃん！？と悲鳴を挙げる妹を無視するとは…顔に似合わず豪胆だ。

「…高町 恭也 だ、なのはが世話になった…」

「ごめんなさいね？なのはちゃんの危機に駆けつけるのが遅れて、不貞腐れてるのよ。で、そちらの方が…」

「執事の鮫島と申します。この度は、アリサお嬢様を助けて頂いて本当にありがとうございます」

忍！と、裏切られたっ！？と表すのが適切な声色でじゃれている保護者二名。それをバツクに深く頭をさげる老執事という構図は可也、レアな光景ではないだろうか？

「先程も言ったが、構わんよ。介入したのは私の意志だしな、礼は今ので十分だ」

しかし…と私は、続ける。

「赤の他人が言うべき事ではないだろうが、アリサ？勇氣と無謀は違う、友達を傷つけられて怒るのは当然だ。だが、正しい行いが更なる悲劇を生むこともある。気をつけるように」

撫でるのを止め、目線を合わせてアリサに話しかける。

「う…、皆に怒られたわ…ごめんなさい…」

「ふふ、そうか、なら余計なお世話だったな。しかし、君達は良い子だな？私が君達の位の頃は、そんなに確り礼等できなかつたが…」

しゅん、と落ち込むアリサの撫で心地の良い頭を撫でながら私は、笑う。

年の頃は10歳くらいだろうか？確りした子達だ…。私がこの子達と同じ位の時はどうしてだろうか？本の虫で良く、母親に公園まで連れ出されていた覚えしかないが…。

「さて、私は、そろそろ行くよ？」

「あの！この後、ご予約とがありますか？」

「ん？特に無いが、嗚呼、探索用の雑貨を見て回るくらいかな？」

「でしたら、お時間は取らせませんので、お茶でもどうでしょうか？」

鮫島が懇懇にそう言って来る。

確かに、何処かで軽食でも食べて…とは思っていたが、地味に旨い珈琲をクロイツから飲ませて貰ったので、どちらでも良いのだが…。

「ん？」

「あの、お礼もしたいの…」

そう考え込んでいたら、裾を引っ張られる感触に顔を向けるとのはが、期待した顔でこちらを見ていた、すずか、アリサを見ると同じような顔。

「つく、こんな可愛らしいお嬢さん達の誘いを断る訳にはいかな

…」

「やったー！こっちなのだ！」

「なのはちゃん、まってよー！」

「なのは！まちなさい！」

そういうと走り出した三人を追いかけてゆっくり歩き出す。

「俺の家が喫茶店なんだが、そこで良いか？」

「シュークリームが凄く美味しいのよ？」

「構わんよ…しかし、大人びているかと思ったら、まだ元気な子供だな…」

一礼して三人娘を追いかけた鮫島に軽く会釈しながら後を追うと、夫婦漫才を繰り広げていた忍と恭也が私に追いついて話しかけてくるのに軽く返しながら思う。

こうやって私の日常は、造られていくのだろう…。

立ち止まってこちらに手を振る三人娘に軽く手を振り、こんな日常もまた良い物だ。と思い急かされ足を進める。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7342j/>

---

テンプレ乙が往くッ！

2010年10月25日07時12分発行